



ACADEMIC GROOVE

CHOICE

The University of Tokyo




CONTENTS

- 04 **PROLOGUE**
プロローグ
- 08 **CHOICE and THE ACADEMIC GROOVE**
これからの「選択とアカデミック・グルーブ」の話をしよう
- 12 **Why do we have to choose?**
なぜ、今、選ばなければならないのか
- 14 **Dissecting Choice**
「選択」を学問で解剖してみよう
- 18 **CHOOSING WHO TO BLAME — propaganda and scapegoats**
「プロパガンダ」と、それにより選ばれてしまった「スケープゴート」たちの物語
- 24 **ACADEMIC JARGON in colloquial use**
日常会話でふと使ってしまう学術用語
- 28 **Dr. Strangelove — or: How I was Influenced by Film in my Research**
博士の映画な愛情 — または私は如何にして映画から学問に影響を受けたか
- 30 **Books to shake your confidence! The poisonous book guide**
あなたの選択をゆるがす! 劇薬書ガイド
- 36 **The metamorphosis of LOVE**
愛のメタモルフォーゼ
- 42 **THE ROAD NOT TAKEN — or: Things Not Chosen**
選択のすきま
- 48 **BEING NATURAL — THAT IS, NOT CHOOSING**
本能のままに — 選択しない、ということ



PROLOGUE



気がつけば、周囲には「幸せには見えない人々」があふれている。
傍から見れば、自分もそのひとりかもしれない。
社会はなぜ、こんなふうになってしまったんだろう。
社会はどこに向かっていくんだろう。

この現実はあるゆる「選択」の結果なのではないか。
「個人の選択」、個人のレベルでは抗えない「社会の選択」、
社会や国家のレベルでは決められない「全人類の選択」、
人類の叡智の及ばない「自然の選択」。
限りなく連続する選択のはてに、目の前の現実が立ち現われている。
未来が選択の先にあるならば、
今、ほくらはどのように「選択」すべきなのだろうか。

そんな思いから『CHOICE』の制作は始まった。
GROOVEに満ちあふれた原稿を取りまとめながら、今、ほくらは思う。

希望がないなんて誰が言った。誰が言ったんだ。



PHOENIX

twitter™

CHOICE and THE ACADEMIC GROOVE

Twitter 往復書簡

これからの「選択とアカデミック・グルーヴ」の話をしよう

複雑系科学者の池上高志氏と脳科学者の茂木健一郎氏によるTwitter上での対談。テーマは「アカデミック・グルーヴとは」と「選択とは」。誰でも会話に参加できることで、まるで本流に合流する支流達のように、莫大なタイムラインがダイナミックなグルーヴをなしていく……なしてたんですけど、紙面の都合上、対談者の発言以外の多くのツイートを掲載できませんでした。悪しからずご了承ください。

構成／南崎梓・山形昌未



alltbl

名前: 池上高志
現在地: 東京
Web: <http://sacral.c.u-tokyo.ac.jp/~ikeg>
自己紹介: 専門は複雑系の科学。一人の人間がサイエンスもアートもやろう、というダ・ヴィンチ宣言中。



kenichiromogi

名前: 茂木健一郎
現在地: 東京
Web: <http://www.qualia-manifesto.com/>
自己紹介: 脳科学者。クオリアを研究。アンチからオルターナティブへ。英語人格 kenmogi もよろしく。

※本来Twitterでは新しいツイートが上にどんどん加わってゆくものですが、紙面での読みやすさのため、上から下に向かって会話が続くように掲載しています。



alltbl おはよう! 寝不足だ。実は、東大の本部企画で、ツイッターでいきなり対談して、そいつを「CHOICE」って本に載せたいっていうんだけど? やる?



kenichiromogi やる。今やるの?



alltbl そう思ったけど。あとでもいいよ。なんせ寝不足。テーマは「選択とは」「アカデミック・グルーヴとはなにか」、ハッシュタグは #acgr だって



alltbl それと、これみてて書き込んだ人のツイートも掲載予定。東大批判もオッケーだそう。ほら、懐が広い。



kenichiromogi そうかわかった。オレね、批判の時代が終わって、建設の時代になったの。(笑)



alltbl 終わるなよ。じゃあ、おれが挑発してやるからw



kenichiromogi 終わっとらん! 具体的にこうしようって、オルターナティブを示したいんだよ。もはや。



alltbl 茂木の最近の発言は、日本の国立大学とくに東大の役割は終わった、的発言でしょ。



alltbl だから、そこそこ、よろしく。でもテーマは「選択とは」と「アカデミック・グルーヴとは」だから。忘れないでねw



alltbl 「アカデミック・グルーヴ」です。真の学問の場に漂う「グルーヴ」。学問の魅力を表す造語だそうです。東京大学発信のアカデミック・グルーヴ運動(様々な研究者のアカデミック・グルーヴを非研究者に紹介する運動)ということ。



kenichiromogi 東大2.0になればいいんだよ。



alltbl うん。なんでも2.0なのは、どうかと思うけど。



alltbl 連続ツイートではなくて、散発的にツイートしあうことにします。ちなみに、自己紹介。僕は現在東大の総合文化研究科、広域システム系/情報学環で教えています。専門は複雑系の科学。出身は茂木さんと同じく、東大の理学部物理学科(茂木さんより1学年上)です。



kenichiromogi ぼくにとって、アカデミズムとは、知性が疾走して、とにかくメータが振り切れている、そういうことを言うのだと思う。地上にいても、心ここにあらず。そんな気配を醸し出している人が、ほんものの学者だ。



kenichiromogi 良く言うけど、ケンブリッジでは、ぱりとしたスーツを着てあるいている人は、普通の人だった。穴の開いたぼろぼろのセーターをきて、壊れそうな自転車をぎこぎこ漕いでいる人がいると、あの人は偉い学者に違いないと思った。



kenichiromogi あと、知性って、結局、常に少数派の側に立つということじゃないかな? 新しいものを創ろうとしたら、常識に対して、結局少数派になることになる。当然風圧もあるけれども、それに向って強く立っていると、知性という樹は大きく育つ。



kenichiromogi 東京大学の問題点は、常識的に過ぎるといところはないか? Not crazy enoughというのが、ぼくのいつも受ける印象。官僚養成の側面が、強すぎたのかな? ケンブリッジのぼろおじさんのような学者がもっといていいと思う。



alltbl そうだな、僕にとってのアカデミズムは、やっぱり未開のジャングルに入って行くようなもの。そのための装置をつくり、勇気を育てるのが大学だと思う。しかし、ジャングルに入った人が最近は少なくなってる。みんな「都市」にいるしね。



alltbl そうだな。少数派と多数派はつねに入れ替わる。だから、ぼくは意見をえられる勇氣、てのが大事な知性の特徴だと思う。そういう例はごまんとみてる。研究は、あるときに得たアイデアに固執しがち、だつつまなくなる。



kenichiromogi 疾走するためにも、東大にも「ハイテーブル」みたいなものを作ったらと思う。分野、専門関係なく、一緒に食事をしたりしながら議論する。それで、会話が始まったら一秒後にはトップスピードに入っている。実質以外の話はしない。



kenichiromogi 少数派が、多数派になっていく。その下克上こそが学問だよ。その意味では、東京大学は下克上の精神から最も遠いところにいるのかもしれない。何回も谷底に突き落とされないと、ほんものの学問は生まれない。安全運転し過ぎるのかな?



tomy_to_me 少数派か多数派かは、結果論であって常識の上で思考停止しないコトが重要なのでは…。ブレイクスルーしようとして思考するのではなく、思考の末にブレイクスルーしてしまうコト。



alltbl でもね、駒場だったら、駅の改札から来る途中で、地質学の先生とあって新しい化石の解釈をきき、16号館の入り口で新しい化学実験の話をする。こういうのって、観客はいないけど、僕が駒場を好きな理由のひとつ。



alltbl 疾走しても、世界観が広がる研究者とそうでない研究者がいる。その違いは何が作りだすのか。それにcrazyな学者が偉い訳ではなく、そういう学者を「飼っている」余裕を大学に、ということだよな?



kenichiromogi 池上は、駒場が、そして東大が基本的に好きなんだよね? 確かに、良いところもあると思う。だけど、ぼくの中に、なん



だか、ざわざわと、このままではいけない、輝けない、世界の最先端の潮流から取り残されるという胸騒ぎがあるんだよ。



kenichiromogi 東大は、明治時代の象徴。いわば「文明の配電盤」。特に、文系の先生は、翻訳学問という色合いが強い。僕は翻訳を決してバカにしていない。コンピュータにはできない創造的なこと。でも、今の世界を支配しているのは直接性の原理。東大は時代の疾走に追いついているか?



alltbl 駒場が好きか? うーん。自分がいるところだからね。渋谷も近いし。しかしあえて第三者的にみるならば、日本の社会が大学を、東大を、学問というものを大事にしてるかって問題はないかな。甘いかな? 無用の用を尊ぶ心は、日本の社会にあるかな。



kenichiromogi 日本の社会に、無用の用を尊ぶ心はあるか。ぼくは、学者がもっと必死になるべきだと思う。たとえば、public understanding of science。ドーキングズのようなことを必死になってやる人が東大に一人でもいたら、時代は変わる。




kenichiromogi イギリスにあって、日本にはない笑いがある。芸人たちのせいじゃない。インテリが、さぼっている。オックスブリッジ出たやつらが、モンティ・パイソンとか作る。そういうことも、回り回って知性に対するリスペクトを生む。最近だと、Sacha Baron Cohen。





alltbl 800年近い歴史を持つCambridge Univ.と130年の東京大学。もっと長い時間スケールで考えないとあかん。例えば入学者全員にiPad配るのが、時代に追いついてる訳ではないのはあたりまえだし。





kenichiromogi 多様性と深さは、持続してきた歴史の長さによって存在する。ケンブリッジの800年。東大が130年にしては頑張っている


 ことは事実。だから、さらに持続していくべきだとは思。問題は、どんなエトスを大事にするか。もっとアナキーで、ロックンロールが欲しい。


 **alltbl** public understanding of science. を大学の先生は下に見る傾向がある。社会の知性は大学がつくる! そういう姿勢がない。それは同意する。おれはそれを変えたいと思って出来ることをやっている。

 **kenichiromogi** 「学問」のとりえ方が狭すぎる。まさに、本家よりも辺境が守旧に走る。Cargo Cult Science. ダウインなんて、日本の狭量な学者どもの基準でいえば科学ジャーナリスト。それでも、『種の起源』の偉大さは全く変わらない。いや、だからこそ偉大。


 **toshikiabe** うちの先生たちが @alltbl @kenichiromogi なかなかロックなこと言いあってる。個人的には学問は「わくわく」させるような面白さがあるから価値があるし、エッジが利いたロックなものじゃなきゃかっこわるいと思う。


 **arukimiko** 「無用の用を尊ぶ心」というのは、「遊び心」ではないかと思。無心になって遊ぶこと。


 **tkaduki** インテリという言葉の含んでいる文脈や対象がイギリスと日本で違うってことなんだろうね。なまじインテリとはこうあるべきだ、みたいなバカみたいな空気もあいて、インテリがコメディやりづらいでしょ。実につまらないと思。


 **alltbl** ぼくは、10万人(国民総数の0.1%)のfollower数を持つ、茂木とのtwitter上での対談が持つ意味は大きいと思。まわりまわって大学にもかならず影響がある。だから、やっています。


cake_i1977 学問云々もあるけれど、大学にいる学生の視点も欲


 しい。企業の出先機関みたいに社会人にとって役に立つことばかりに力注がないで欲しい。リベラルアーツって無用の用だけ生きて行く糧になるものと文系出身のぼくは考えてます


 **kenichiromogi** 学術情報自体は、どこにもある時代。大学の役割は、コミュニティ・ビルディングにあると思。人が集まって、生のコミュニケーションを起こすことで、知の臨界反応を起こす。将棋の棋士の卵が、全国から「奨励会」に集うように。


 **kenichiromogi** 鍵になるのは、「ピア・プレッシャー」のベクトルの逆転。普通は、平均値へ戻そうとする圧力が生じる。うまくコミュニティをつくれれば、逆に、「もっと飛ばせ」「さらに上に行け」という加速圧力を生み出すことができる。

 **kenichiromogi** 「お前、ドウルズ読んだ?」「ああ、『意味の論理学』だけね。」「そうか、まさか、翻訳で読んだんじゃないだろうな。」「当然原書だよ。」というような会話が交わされるのが、大学のエトスでなければならぬ。


 **shinyayasuaki** そんな大学は殆どないし、文科省は期待してないです。


 **alltbl** 要は「優先順位」の問題。なにが、自分のなかでpriorityが高いか。今、一番面白いと思うことをする。というのであれば、そういうコミュニティもできるはず。ほんとはやりたいけど、現実的には、、、というエクスキューズをつぶす。


 **fumikono** 「何に役立つかわからないのに惹かれる」その心のままに突進する人を学問の人と感じます。予算つけるために苦労して矮小化する構図がありそうな印象もあります。


 **kenichiromogi** 「走れ走れ走れ」とオシムは言った。「キツネに追いかけてられているウサギが、今


肉離れなので待ってくださいと言いつつ、池上の言う「エクスキューズ」がない世界。これを、大学に。

 **alltbl** エクスキューズしない。これはもうひとつの「選択とは」ということに、関係してくるね。どういことを選択するか、あるいは選択しないか。


 **kenichiromogi** 学問とは、つまり、選択の豊饒に気付かせることだよ。真理を未知の大海にたえたニュートンが到達した境地は、つまりそのこと。ぼくたちは、砂浜できれいな貝殻を拾っている。少年のように、夢中になりながら。黒雲あっても、それを忘れて。

 **alltbl** かっこいいね。学問は、あることを選択してそれに一生身を捧げる的に考えがちだけど、背後にある選択の豊饒こそが、学問の姿だものね。世界観の広がる研究は、その豊饒性がみえてくることだ。


 **alltbl** なんて、いったん選択しちゃったものが絶対で、そこからしか考えられなくなるのか。茂木の好きな脱藩とは、そのヴァーチャルな拘束からの脱出でもある。脱出できるんだ。


 **eriko23** 学生に「選択」の豊饒を見せることで、進振り※のある駒場ならではの教養教育を作れると思。そのためには研究者自身が自分の「選択」を自明のこととせず、常に世界観を広げ続ける姿勢が大事だと思います。


※ 東京大学では、入学後の2年間、全学生が駒場キャンパスの教養学部(現 学芸学部)に所属する。学部に分かれるのは3年生からで、それまでの成績と本人の希望によって進学先が決定される。これを進振り(進学振り分け)と呼ぶ。


 **okonomibutatama** 私の持論だが、政治は最後に対応していくのが元々日本の状態。本当は政治主導で教育現場のあり方が変わるようにするのが手取り早そうだが、まず、大学自身が、そして


企業が変わらなければ何も変わらない。一人一人が声を上げなければ、まず組織は変わらない。


 **日本のハッシュタグ hash_jp** 11時30分~12時30分の急上昇タグ1位 #acgr 2位 #atakowa http://bit.ly/d4FZ2h #followmeJP 2010年9月23日 12:30:03

 **alltbl** 知なんてのは、開かれてなきゃ意味がない。とにかく開かなくちゃ! そいつがアカデミックグループを規定し発動させる。理科も人文もアートもおなじ。アーティストの宮島さんと、意気投合した。


 **tomy_to_me** 学問はそもそも、分野に細分化されていなかった、ダヴィンチが科学や医学もクロスオーバーしていたように…アートというジャンルではなく、美意識という視点が今、ノンセクションに俯瞰するキーワードとなるのでは、と考える。


 **kenichiromogi** 池上が言うように、知はオープンじゃないと意味がない。大学は、「排除」の論理ではダメなのではないか。自分たちのアカデミック・グループを、いかに多くの人に、無料(=自由)に届けるか。その本気度で、輝きは決まる


 **kenichiromogi** TEDがHarvardの競争相手として認識される時代。大学が、その学術資源を、惜しげもなく拡散することで、意義は深化する。そのことと、伝統的な意味での「学生」と「教員」から大学が構成され続けることは、矛盾しない。大学よ、知をポトラッチせよ!


 **kenichiromogi** 学者がもっとロックンロールしたら、日本は面白くなると思。その説、理論に接したら、もう興奮して、ビートルズの登場を見た女の子たちのように、キャーと叫んで街を疾走したくなるような。


kenichiromogi 知のオルタナティブを示し続けること以外に、学


 問の矜持はない。破壊が目的じゃないんだ。新しいものを創造することに全力を傾けているうちに、気付いたら、風景が変わっている。明日は今日とは異なるというありったけの未来感覚。


 **kenichiromogi** 今の大学を否定する必要なんてない。でも、シンプルに従って懸命にロジックを磨き、点と点を結んでいて、いつの間にか全く違う場所にいたら、それは素敵だね。どこに行くかわからない時に人は最も創造的。

 **kenichiromogi** 池上高志も好きな『三四郎』には、「どこにいくかわからない」という不安と恍惚が充ち満ちているね。久しぶりに読み返して、上手に思い出してみようよ。


 **alltbl** 若い時にはどうしようか悩む。不安につぶされそうになる。そのときに、日和って安易な方を選ぶ、ことがないように。それだけが大事。不安定が、人生ロックンロールする基盤だと思う。不安のないところに創造はないよ


 **kenichiromogi** 人は、人生のどこかで、勇気を使うのだと思。初めての告白、進路の決定、果敢な挑戦。学問するということは、勇気を持ち続けるということかな。しかも、その成果が、自分のものというよりは人類共通のpublic goodsとなることを夢見て。


 **alltbl** 茂木はかっこよすぎるよ。でも、エクスキューズしてるヒマはない。未来圏から風は吹いてくる。宮沢賢治の詩のように。この時代に強いられて奴隷のように重苦しく生きるのではなく、新しい時代のコペルニクスやマルクスやダーウィンになることを選ぼう。


 **cosycoosy** 大人が「それはダメ。これはダメ。」って言うからダメなんだよ。「何やったって良いんだよ。」って一言言ってあげれば、若者なんてみんな勝手にロックするよ。若者だけに限らずおっさんも。


もちろん学者も。


 **tomy_to_me** いろんなモノがあらかじめ出来上がってしまっていて、新たに入り込む余地が無いような錯覚に囚われてない? 世界は決定した正解の上を進んでるわけじゃない、暫定的仮定の中にあるに過ぎない。常識や定説は現状は説明できて明日には破綻するかもしれない。もっと疑え、素直に疑え。

 **kenichiromogi** 個別に普遍が宿る。ぼくはそれをほとんど信じている。日本が今直面している国境紛争や、ガラパゴス化、日本語が英語かという言語政策の問題も、誰にでも起きうる普遍的現象としてとらえ、モデル化し、解析することで新しい学問ができると思よ。

 **TerminusMK** 学問は秘術ではない。なのに社会や初学者に分かりやすく説くことを日本のアカデミズムは軽視し過ぎてきたのではないか。敬意を権威にすり替えて逃げ、しかも学生は権威の心地良さだけを学んで社会に出て行くという悪循環。大学不要論は自ら蒔いた種。

 **bixametica** 新しい学問の確立の過程で、個別は普遍と実は分かち難い間柄なのだと思う。時代が変わるのだから。QT@kenichiromogi: 個別に普遍が宿る。ぼくはそれをほとんど信じている。...

 **alltbl** みなさんに協力してもらいつつ進行した、茂木健一郎と私のtwitter対談。そろそろ切り上げてはと思います。個人の力を信じて、組織とは関係なく、知をつくり知を開く。思ったら即、ガンガン選り取って行く勇気! ということでした。

 **alltbl** この際だから、言っておきたい場合は、是非。こういうのを機にいろいろ実空間で、面白いことが始まるってことは、よくあります。

科学の進歩が産んだ5つの選択

なぜ、今、選ばなければならないのか

脳と機械の融合は どこまで 許されるのか?

現在、米国では「1000ドルゲノム」構想が進められており、個人が気軽に自分のゲノム情報を手に入れられる時代が目前に迫っている。病気の予測や、体質に合わせた投薬を行うオーダーメイド医療、自分のルーツを探ることが可能になるだろう。但しゲノム情報は究極の個人情報であり、厳密に管理されなければならない。個人ゲノムは誰が管理し誰が利用するのか。解読対象をどの範囲まで広げるのか。雇用や保険加入、結婚に際しての遺伝子差別、市場取引の危険性もさることながら、個人ゲノムの価値は未知数で将来予測できない利用法が生まれる可能性もある。我々は個人ゲノム時代をどのように迎えるべきだろうか。

個人情報である ヒトゲノム、 誰が管理し誰が 利用するのか?

脳と機械

を繋ぐブレイン・マシン・インターフェイス (BMI) 技術はSFの世界だけでなく、現実の医療ですでに用いられている。例えば、頭部に埋め込んだ機械から電気信号を出す人工内耳により、聴覚を獲得した人が世界で10万人以上もいる。現在、脳卒中などで失われた運動能力を再建する運動制御型BMIは世界各国で激しく研究競争が行われている。一方、BMIの情報通信分野への応用も始まっており脳情報を用いたゲームはすでに商品化されている。さらに言葉を用いない脳同士のコミュニケーションや市場調査に脳の反応を取り入れる研究も進んでいる。しかし、未だ答えの出ないいくつかの問題が浮かび上がってくる。電気刺激のON/OFFで脳の状態が変化する場合「自分」とはどの時点の自分なのか。医師や専門家や家族はどのような権限を持つべきなのか。このようなグレーゾーンが存在するBMIを娯楽やビジネスにどこまで用いてよいのだろうか。脳に機械を埋め込むことの長期的な影響はまだわかっていない。治療を越えた能力増進にBMIを用いて超人間的なスーパーマンを生み出すことの是非を議論する必要もあるだろう。BMI技術は人間の在り方を覆す力を持っている。この大きな力を、我々はどのように使えばよいだろうか。

医療の発展

の恩恵として人類は長寿命を手に入れた。その結果として世界的な高齢化が進んでいる。日本では2030年に高齢者(65歳以上)が人口の3分の1に達し社会保障費が現在の倍に膨れ上がる。さらに全国的な医師・病院不足はすでに始まっておりこのままだと病院は機能しなくなるかもしれない。福祉国家の破綻を意味する状況にあるが、これに対する方策は未だ全く定まっていない。

到来する 高齢社会。 福祉国家に代わる 道とは何か?

映画の話だと思っていた、あんなことやこんなことが、すぐ目の前に迫っている。進歩は幸福をもたらすのか、それとも…。我々は光と陰を見つめ、進むべき道を選びださなければならない。あなたは選択を避けられない。未来は必ず来るからだ。

監修／後藤純、佐野和美、水島希、森田朗、山邊昭則、吉澤剛 取材協力／清水哲郎、城山英明、山野泰子 構成／南崎梓

生命を 創ってよいのか?

原子力を利用した以上、放射性廃棄物の処理問題は不可避である。使用済み燃料に含まれる元素の中には、安全な水準まで崩壊が進むのに数万年を要する場合もある。さて1万年後の地球に我々は責任を持てるだろうか。遠い未来の我々の子孫や地球の生物を守るためには、人類の管理を離れても確実に放射性廃棄物を隔離し続けられることが必要である。そこで日本では地下深くの地層の中に処分する地層処分することに決まり、2002年から原子力発電環境整備機構が地層処分を行う場所を公募している。地層調査期間中には毎年数十億円の補助金が支払われるが、風評被害への恐れや住民の不安から、現在手を挙げている地方自治体はなく、立地のめどは立っていない。

高レベル 放射性廃棄物の 最終処分場は どこに?

すでに人類は細胞を創り出すことに成功している。生体分子を組み立てて新たな生体システムを創りだす合成生物学(または構成生物学)は現在急速に発展しており、生産性の高い食物やがん細胞に特異的に抗がん剤を与えることのできるような大腸菌が開発途上である。またインフルエンザウイルス等の病原体の再構成に成功しており、病原体の構成メカニズム解明に期待がもたれている。世界的な食糧危機やパンデミックから我々を救う手だてとなりうるだけでなく、生命の神秘の解明に大きく近づく研究でもある。しかしながら、自然には存在しない生命体をつくり出すことが自然界にどのような影響を与えるのかはわからない。そもそも生命の定義は明確ではなく、どのような細胞を生命とみなすのか、生命と定義される細胞の作製が技術的に可能になった場合にどのような対処をとるべきかについてのガイドラインは未だつくられていない。我々が「かつて存在し得なかった生命」と出会う日は来るのだろうか。

Why do we have to choose?

Dissecting Choice

経済学から見る「意思決定」の科学

「選択」を学問で解剖してみよう

なぜ私たちは、何かを選択することに頭を悩ませるのでしょうか。どうして何かを選択することは、いつだって複雑で困難なのでしょうか。選択の諸相を眺める前に、ここはひとつ、選択そのものに焦点を当てて、その仕組みについて考えてみましょう。選択を扱う学問といえば、経済学が有名です。経済学者・松井彰彦先生が、私たちの身近な選択の困難について解説してくれました。

解説／松井彰彦 構成／堀越直人

健太 いやあ、遅れてすまん。出かけに課長につかまっちゃってさあ。でも、お前ら、調子いいよなあ。

さつさと仕事あがつて、「お先に〜」なんて行っちゃまうんだもん。あ、おねえさん、生中ちようだい。

智子 だって、健太のこと待ってたら、いつになるかわからないもの。

健太 まあ、いいや。で、何の話していたの？

智子 結婚相談。

健太 ふん、智子もとうとう寿か。そいつはよかった。で、どこの玉の輿？

智子 違うわよ。正毅の話。数ヶ月前には、結婚するかもって言っていたのに、相手のほうが、今「つ乗り」気じゃないらしいのよ。

正毅 そうなんですよ。最初は向こうが結婚したいなあ、なんて遠まわしに言ってきたのに、実際こつちが決心して話題に出したりしたら、「別に今年とか来年とかじゃなくてもよくない？」とか言い出すようになって。※1

健太 それはまずいねえ。ところでカノジョ何歳？

正毅 29です。僕が23ですから、6歳上ですね。今、生化学の博士課程なんです。

健太 もう30じゃん！正毅、言いつらいけど、お前、二股かけられてるな。

正毅 え、ましっすか!? なんてですか!?

智子 健太、あんまりいい加減なこと言わない方がいいよ。あのねえ正毅、萌絵さんはきつと、もう少しバイオの研究に集中したいのよ。

正毅 それって、結婚より研究が大事ってことですか？

健太 そう。お前よりバイ男のほうが大切ってことだ。あ、生中とモツ煮ね。

智子 うーん、結婚したくないとかじゃなくて、手前まで来ちゃって、逆に踏み切れない感じなんだと思うな。結婚つてやっぱりオオゴトじゃない？ 大体、準備だつて大変だし、結婚した後だって、どうしても女性は家事の時間が増えたりするわけだし。※2

正毅 家事なら僕やりますよ！この前だつて手料理を振舞ったんですよ。

智子 うーん、どうかしら。だって正毅のは趣味の料理でしょ。主婦の料理はそんなに甘いものではないわ。今は出来るつもりでも、もう少し責任のある仕事を任されて忙しくなってきたら、結局放り出してしまっくんじゃない。※3

正毅 …

智子 それにさ、女性はやっぱり歳に敏感よ。正毅は気にしないと云つても、本当に気にしていないのか、正毅の心が離れていくんじゃないか、とか考えちゃうじゃない。

健太 そうそう、女房と畳は新しいほうがいっていうからな。あ、おねえさん、生中も一つ。

正毅 どうしたら、萌絵さんが結婚する気になってくれるんでしょう？

智子 うーん、何かきつかけというか、背中を押すようなことがあればいいと思うんだけど。正毅と萌絵さんは何つながりだっけ？

正毅 萌絵さんは二階堂教授のゼミの先輩ですよ。

智子 あ、そうか。それなら指導教員つて手があるかも。萌絵さんが信頼している指導教員から、「正毅君は優秀で、頼れる男だ」とかつて言ってもらえたら、萌絵さんも結婚を真剣に考えてくれるかもしれないわよ。

正毅 おお、先生を抱き込むのは悪くないかも！※4

健太 おれはそういう姑息な手段はいやだな。男なら直球勝負だ。おい、智子、黙って俺についてこい。

正毅 せ、先輩。酔った勢いでどさくさに紛れているみたいですけど、今の、告白ですか？

智子 ほうつておきなさい。それで正毅、先生と仲良い？ゼミの成績とかよかった？

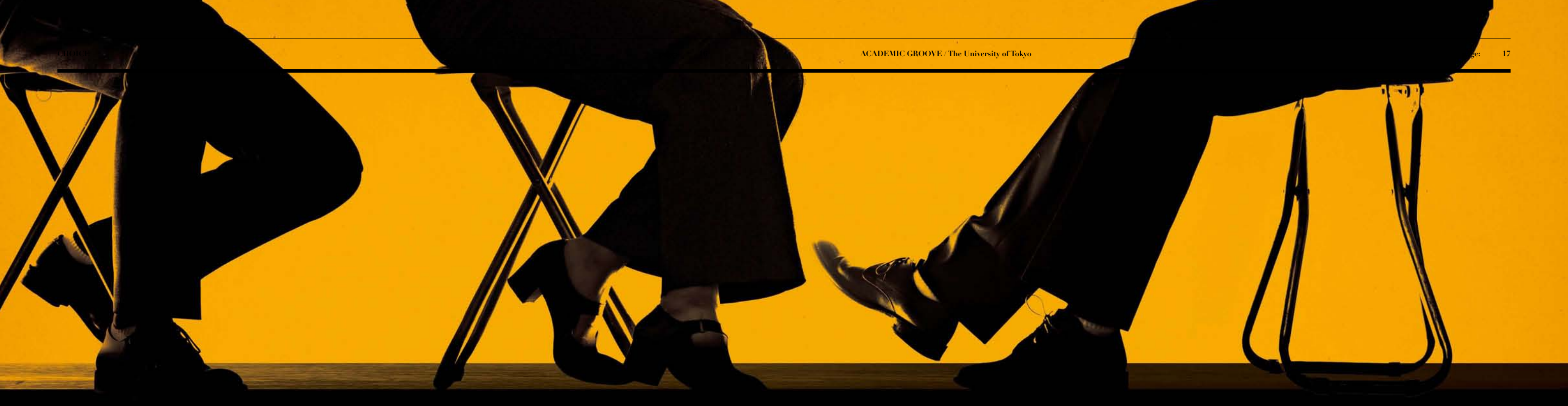
正毅 あ、それは…

智子 無理そう？

正毅 ……は、僕たちもう駄目かも。※5

健太 俺も駄目みたいだ。しかし、そう悲観するな。世の中、半分は女だ。新しい恋愛に向けて乾杯！

正毅 せ、先輩…



1 「選択」の科学

恋は落ちるもの、結婚はするもの

人生は選択の連続です。幼いころの「プリン、それともアイスクリームがいいかな」に始まって、進路選択やらサークルの選択など数えあげたらキリがありません。その中でも人生最大の分かれ目が仕事と結婚の選択といっても過言ではないでしょう。恋愛は千変万化。型にはめることはできません。しかし、恋は落ちるものですが、結婚はするもの。恋愛に関する「選択」の科学は難しくても、結婚に関する「選択」の科学ならば、可能かもしれません。科学は本来、無粋なもの。恋する二人の選択問題を少し解剖してみましょう。

2 読み合いのサイクル

女心と秋の空

女心と秋の空は、どちらも読みづらいものの代表です。しか

し、両者には決定的な違いがあります。秋の空は確かに予測困難ですが、少なくとも、空はあなたの心を読んで行動を変えたりはしません。それに対し、恋愛相手は、あなたが思い悩んでいる正にその瞬間、同じように思い悩んでいます。相手のことを読むというのは、あなたのことを読もうとしている相手を読むことでもあり、相手のことを読もうとしているあなたのことを読もうとしている相手を読むことでもあり、…というように読み合いがぐるぐるとサイクルを起こして何を選択すべきか分からなくなってしまふ。そこに人間関係の難しさがあるのです。これはゲーム理論の世界では「読み合いのサイクル」と呼ばれ、ジョン・ハーサニはこのサイクルの解決策を導き出した功績で、ノーベル経済学賞を受賞しています。

3 ホールドアップ問題

釣った魚にえさはやらない

結婚前は家事も育児も一緒にしようね、と言ってくれたのに、などと不平を言っている女性がいたら、自分の不明を嘆いたほうがいいでしょう。結婚すれば二人の関係はがらりと変わります。それまで、いざとなれば、「ごめんなさい」の一言で終わ

りにできた関係から、結婚すると強力接着剤でくっつけたような関係になります。逆に言えば、つなぎとめるために無理して歡心をかう必要がなくなるのです。このように、一度選択されれば元に戻すのが難しく、さらに相手の立場が強化されてしまう問題は「ホールドアップ問題」として知られ、ゆえに選択しづらいものとなります。それがわかっているから賢い女性はなかなか結婚に踏み切れないのかもしれませんが。男性のほうも、本気で家事・育児をするつもりなら、週末の豪華料理よりも、さりげない後片付けのほうが効果的かもしれません。

4 チープ・トークの経済学

当事者の声と第三者の声

相手が態度を決めかねているとき、第三者からの口添えが決め手になることがあります。筆者らは、声の効果を「経済学実験」によって検証しました。実験は、お金を持っている独裁者に対し、「いくらください」、「いくらあげなさい」と言うという単純なもの。結果は当事者の声よりも第三者の声のほうが効果がある、というものでした。しかし、同じ実験をチャットを用いて行ったところ、当事者とのチャットでは、独裁者はお金を山分けしてくれた

のに、第三者とのチャットでは、「君のものにしちゃえば」という声に後押しされた独裁者はお金をがめてしまいました。利益と直接関係のない第三者からの「チープ・トーク(無駄話)」の影響はこのように案外軽視できないもので、経済学において研究が急がれているところでは。第三者に不利なことを言われないう、十分気をつけなくてはなりません。

5 マーシャルの箴言

熱き心と冷静な頭

岡目八目という言葉があります。これは、傍目八目とも言い、傍観者は、八手先まで読めるという囲碁の諺です。それならば、相手の気持ちを読むために、一歩下がって岡に上がってみるのでもいいでしょう。ただし、冷静になるあまり、間違っても恋する心を失わないように。結婚するころには関係が冷えきっていた、というのでは話になりません。「熱い心と冷静な頭脳を持つことが大切」と語ったのは経済学の巨星マーシャルですが、同じことは恋愛や仕事にも当てはまるでしょう。恋愛上手は仕事上手、かもしれません。

「プロパガンダ」×「選択」=「スケープゴート」

Choosing Who To Blame

PROPAGANDA and SCAPEGOATS

「プロパガンダ」と、
それにより選ばれてしまった「スケープゴート」たちの物語

「プロパガンダ」は人々の選択を加速させる。その結果、我々は「スケープゴート」を選び出し、責任転嫁する……
ここでは、様々な学問があぶり出す「現代社会におけるプロパガンダとスケープゴートの関係」を紹介しよう。
真の問題はどこにあるのか、あなた自身の目で選択をして欲しい。

構成 / 山形昌未

プロパガンダとスケープゴート 鶴岡賀雄

プロパガンダもスケープゴートも、宗教に深く関わる言葉である。プロパガンダは「広めるべきもの」といった意味で、かつてはキリスト教の布教活動も指したが、転じて政治的宣伝の意味になった。スケープゴート、つまり身代わりの山羊は古代世界に広く見られた風習で、旧約聖書にも出てくる。年に一度、あるいは随時、人々の罪や穢れを一頭の動物（山羊にかぎらない）に全部転嫁して荒野に追放する。これによって集団の罪や穢れをぬぐい去り、皆がまた幸福に生きていけるようにするための儀式だった。

人は社会生活を送るなかで、大小の不正や悪をどうしても犯してしまう。その

罪意識を拭うために、古代社会ではスケープゴートが必要とされた。問題はしかし、どの山羊が身代わりに選ばれるか、しばしば理不尽で予想がつかないことだ。最も無垢で浄らかなものが選ばれることも多かった。キリストは全人類の罪を一身に背負って殺された究極のスケープゴートと見ることもできる。

こうした構図は、宗教とは無縁なはずの現代社会でもさまざまなかたちで生きている。人は、自分が属する集団を支えている信念や価値観を他の人々にも広めようとするし、どうしても受け入れない人々がいると、排除する。社会秩序はそうして成り立つ。では、現代社会のプ

ロパガンダは何か？ 誰がスケープゴートとして選ばれ、追放排除されているのか？ 公衆の耳目を惹く、あるいは密かになされるスケープゴートの排除によって、私たちの社会は本当に浄められ、罪意識は拭いざれると言えようか？

社会秩序に支えられた幸福な生活が「プロパガンダにより選択されたスケープゴート」の追放によって保たれているのではないかと気づいたとき、私たちはおおきな不安やとまどいの中におかれるだろう。この不安やとまどいから安易に逃れようとせず、ことの真相を見極め、これに知的に立ち向かうこと、ここに現代の大学における学問の一つの使命がある。

[SCAPEGOAT 01]

学校・先生



メディア等のプロパガンダによる学校のスケープゴート化

勝野正章

昔、学校は普通の保護者にとって敷居が高く感じられる場所であった。学校からの呼び出しがあると気が気ではなく、「学校に行くのは、ほんとうに厭だよ。学校と警察だけのごめんだ。何も悪いことをしたわけでもなからうに、どうして学校へなど出向いて行かねばならんだろうね。」(井上靖『夏草冬濤』より)と言わしめるような怖い場所でさえあった。しかし、現在の様変わりはどうだろう。学校は保護者や地域住民からのクレーム対応に明け暮れている。

なにが学校の敷居をここまで低くしたのだろうか。高学歴化が進み、

その点での教職員の優位性が失われたことなど、いくつもの要因が働いているはずだが、学校・教職員パッシングの影響も大きかった。そうした批判的言説はしばしば、子どもや若者が引き起こした事件をはじめ、数々の社会問題の原因が教育にあるかのように語ってきた。しかし、冷静に考えてみてほしい。学校はそんなに万能だろうか。高度情報化社会といわれる世の中で学校の影響力はむしろ格段に低下しているのではないかな。にも関わらず、心の教育、キャリア教育、食育、コミュニケーション能力の育成……と、学校を批判しつつ、学校

の責任領域をむやみに拡大していくならば、行き着く先は正真正銘の機能不全ではないのか。

世界で最も忙しい教職員は日本の教職員である。しかし、教職員の健康状態や仕事への姿勢に関するデータは、これまでの「頑張り」がもはや限界に達していることを示している。いま政治・行政・社会がなすべきことは、教職員が専門的な力量を発揮できる条件を整えることだ。当たり前のことだが、教職員も信頼されることで、やりがいを感じつつ仕事に打ち込めるのである。

[SCAPEGOAT 02]

高級官僚



政権選択における「マニフェスト」プロパガンダと「官僚＝専門知識」スケープゴート

樋渡展洋

「最大多数の最大幸福」による自己統治の手法として人類が到達したのが民主政治である。それは現実の制度であるとともに高邁な理想であるがゆえに歴史的实践の中で漸進的に改善されてきた。現代情報化社会では、政党・政治家は有権者の代表たるべく政策・マニフェストを提示し、政権獲得を求めて競争し、その代理人として有権者の総意に近い政策を決定・実現しようとする。

ところで、民主政が、対内・対外的にスケープゴートを仕立て、無責任な経済政策や冒険的な軍事行動で国民を煽動する独裁ポピュリズムに墮落しないためには、与野党が対立し、相手の政策の挙証的批判・反批判に依る相互抑制と均衡の中、責任ある政策規律の確保が重要である。対立政党・候補が、その政策

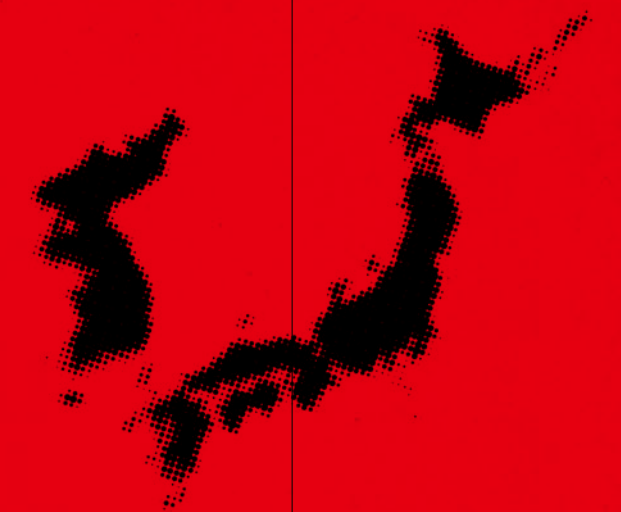
を情報と知識を動員して弁明し、同様に実証的な相手の批判に立証的に反論する制度発展は不可欠なため、民主政の発達とともに、選挙での（予備選など）地元候補者討論会や党首討論の幾度の放映、マスコミでの与野党の政策に関する専門家による不断の賛否討論が飛躍的に拡大してきている。

民主政でのマニフェストの「誹謗中傷」や「誇大広告」に対する立証的相互暴露の根底には、言論・表現の自由があり、その中に政党・候補者が潤沢に資金を使って政策宣伝する自由も、各党政策を報道機関が党派的批判する自由も含まれている。日本では候補者や党首、有識者の挙証的討論は未発達で、選挙での連呼やマニフェストの列挙的紹介が主流で、その弊害が、「政治主導」での官僚・専門性や

財政規律（消費増税）、構造改革（格差拡大）、日米同盟（軍勢力）の安易なスケープゴート化であろう。

民主政での有権者代表の競争的選出と、政府内の抑制・均衡に依る政策の規律確保には多大な専門知識と情報の準備・動員・蓄積が必要であり、政党、議会スタッフやシンクタンクの充実、政治家、ジャーナリストの政策学習への膨大な知的投資が前提である。その投資を怠り、官僚に依存しながら、その官僚をスケープゴート化し、メディアがプロパガンダのマニフェストの伝播に終始している民主政は、まだ未熟なのである。競争的民主政の運営が、自由で知識集約的討論が必須としているだけに、それは政界、マスコミ、学界での多大な人的資本投資・動員を前提とした大変贅沢で高価な制度なのである。

[SCAPEGOAT 03]

在日朝鮮人
外国人

関東大震災下の朝鮮人虐殺事件から見る在日外国人のスケープゴート化

外村大

1923年9月1日の関東地方を強い地震が襲い、その翌日から数日間にわたり、多数の朝鮮人が殺害された。この事件の直接的な原因は、「朝鮮人による放火」といったデマで、背景には民族独立運動を展開する朝鮮人を危険視する日本人の意識があった。

しかし当時、朝鮮人敵視のプロパガンダが大々的になされていたわけではない。むしろ、3・1独立運動を受けて日本帝国政府は「一視同仁（天皇の下での日本人・朝鮮人の平等）」を宣伝していた。そうしたなかで民衆が集団的殺人行為にまで及んだのはなぜだろうか。デマの流布や独立運動のほかにはどんな要因がそこに働いていたのだろうか。

歴史学者がその問題を考えるとすれば——ほかの問題について考え

る場合も同じだが——出来る限り当事者の立場に即して内在的に歴史事象を捉えていくという方法を取る。単純なことだが、そう簡単ではない。なぜなら、過去のある時点の心づらとであれば誰しも共有していたような感覚や作法、常識が現在の私たちには分からないし、分かっていないこと自体も気付かないことが相当に多いためである。

関東大震災下の朝鮮人虐殺の当事者について考えれば、彼らは第一次大戦後の景気後退の時期のなかで低賃金労働力たる朝鮮人流入の急増を体験していたこと、新聞でしばしば朝鮮人と犯罪を殊更結びつけるような記事を目にしていたことなどをまず踏まえる必要がある。もちろんこれ以外にも現代の歴史研究者が見落としている、しかし過

去を生きた人にとっては当たり前に見えていた重要なことは多々あろう。そしてそれらを理解したとしても、スケープゴート的な殺人を防ぐ特効薬が見つかるわけではない。

ただ、このように歴史事象を内在的に見ていく作業を進めるうちに、現代の問題との類似に気付かされることは多い。例えば、「一視同仁」が建前のスローガンでありながら朝鮮人を潜在的に危険視していたことは、「多文化共生」が正しいこととされながら外国人排斥が伏流している現代と似ているのではないだろうか。その類似が何を意味するのか、あるいは背景は何かといったことを考えるのもおそらくは歴史研究者の役目だろう。

[SCAPEGOAT 04]

イスラム
特定アジア
内敵

INNER
ENEMY

どうしてプロパガンダに縋るのか
なぜスケープゴートを求めるのか

藤原帰一

権力者の要諦は国民の一体感の培養だ。政府と一体だと思込んだ国民は権力者の寿命を延ばしてくれる。そして、国民に国家と一体だと思わせるためにいちばん簡単な方法が恐怖による団結である。やつらがわれわれを脅かしている、やつらに立ち向かうために団結しなければならぬ。もちろん、安全の供給が国家の仕事である限り、国家がわれわれの中心に位置することは疑われない。恐怖を煽るプロパガンダが政府を支え、政治の安定を生み出すという逆説がここにある。

では、誰が敵なのか？ ここで重要なのは、外の敵、つまり「ナチ」や「ソ連」のような外から攻め込んでくる主体ばかりでなく、内なる敵、すなわちわれわれの内部に巣くうやつらの存在である。

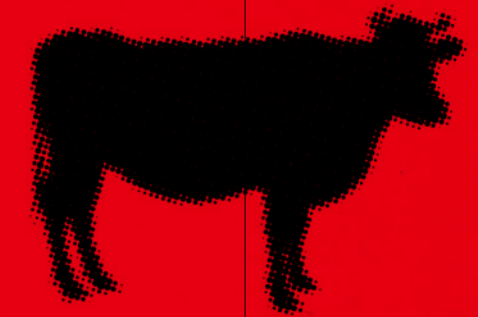
かつてカール・シュミットは外敵と内敵の双方が政治統合を支えると論じた。内部の裏切り者によって安全が脅かされているという恐怖は、外から攻撃を受ける恐怖よりも具体性が高く、訴求力が高い。友敵に頼る政治は外部の敵ばかりでなく、内部の敵を絶えず作り出さなければならない。国民とすれば、自分が内敵ではない証を立てるためにも内敵の発見に力を注ぐ。外敵に頼るプロパガンダは、内部におけるスケープゴートの創出と裏表の関係に立っている。革命政権は反革命分子なしには支えられず、非国民がいるから国民の外延もはっきりするのである。

政治学では、プロパガンダとスケープゴートの結合が大衆社会の病理や全体主義体制の特徴として議論されることが多かった。だが、大衆宣

伝によって専制を支える独裁者が退場すれば友敵の政治も終わりを告げるのか。「やつら」のなかに「われわれ」と同じ顔を見出すリベリズムの政治が勝利を収めるのか。おそらく、そうではない。共産党支配が倒れた後のロシアになお生き残るユダヤ人迫害、オバマ大統領の拒絶を押し切るようにアメリカに広がるイスラム恐怖、あるいは現在日本における「特定アジア」の名の下の中国韓国への恐怖は、公式の政治が否定した後でも内敵への願望が生き延びることを示している。友敵の政治を権力者の策謀に矮小化することはできない。内部の敵を求めるのは私たち自身だからだ。

[SCAPEGOAT 05]

食品事業者



信頼と裏切りのなかで揺れながら、
スケープゴートを生み出す「食」の世界

矢坂雅充

食の安全や信頼性への関心は移ろいやすい。安全で嘘偽りのない食べもので食事をするのは当たり前のことだから、マスメディアが大きく取り上げるような事件や事故が起こらなければ、とくに話題として取り上げられることもない。2000年の乳業メーカーによる大規模な食中毒事件、翌01年のBSE罹患牛が発見されたときのパニックともいえるような社会的な混乱が嘘のようである。当時、食品の安全性にたいする不安が消費者に一挙に広まり、小売業者も消費者の不安に敏感に反応した。事件を起こした乳業メーカーの牛乳・乳製品、また牛肉はかなりの期間にわたって店頭から姿を消した。企業や政府は食の安全を脅かした責任を厳しく追求されて、企業の存続が否定され、莫大な公的負担による補償要求が

突きつけられていった。

相互信頼に基づく社会が崩れつつあるという漠然とした不安が募っている。私たちは企業や政府の「裏切り」に強く反応するのだろう。裏切り者の食品事業者にもっと厳しい社会的制裁を加えなければ、十分な抑止効果は発揮されないという意見も多い。そこには繰り返される食品スキャンダルへの徒労感がにじんでいる。この10年あまりの間に、食品事業者の表示偽装や表示ミスなどには驚かなくなり、健康被害をとまなわなような食品スキャンダルには麻痺しつつあるからである。

相次ぐ食品事故・事件を契機として、再発防止のための規制や支援策が次々に導入されてきた。対症療法的な対策が積み重ねられてきたものの、消費者の関心呼び起こす

食品スキャンダル批判を原動力とした政策整備には限界がある。食品衛生管理、トレーサビリティ、公的監視やモニタリング、検疫などを有機的に関連させた政策体系に展開していく道筋はみえてこない。食品の安全と信頼性を確保するのは食品事業者の社会的な責任であり、食品スキャンダルが発生しにくくなる対策や被害を最小限に抑える仕組みは、私たちの社会のインフラである。消費者の安全・安心への評価が食品事業者の経済的利益・負担につながるという基盤づくりから、相互の持続的な信頼関係の修復作業が始まるといえよう。

ACADEMIC JARGON in colloquial use

研究室における表現上の「選択」

日常会話でふと使ってしまう学術用語

「日常」と「学術」が相分離しているあなたも、

ここに載っているインベントリーでプリコラージュな学術用語をサチることなく史料批判すれば、アカデミックグルーヴを感じるスレシールドがぐんぐん下がり、やがてあなたにとっての「日常」と「学術」は縮退していくことになるだろう。
※「日常会話でふと使ってしまう学術用語」を読めば、この文章がスラスラ頭に入ってきます。

構成／佐藤悠・南崎梓

【このコーナーの読み方・楽しみ方】

このコーナーでは、学生や研究者から教えてもらった「日常会話でふと使ってしまう学術用語」をまとめて掲載しています。各用語には以下①～④の解説・用例が付いているので、こちらで意味を確認しながら読み進めてください。

【解説・用例】

①用語の学術的な意味 ②用語の拡張された意味 ③用例 ④用例の意味

※ペンネームでお送りいただいた方には、名前の後ろに👤と表記しています。

【書誌】(文学)

①ある書物(主に古写本など)の規格や出版状況についての調査記述

②現在通用の書籍における著者や値段などの一括情報

③「新刊でいい本あるんだけど」「へー、書誌は?」

④「新刊でいい本が出た」「タイトルは? 誰が書いたの? 値段は? 出版社は? A6版それともB5版? 全何頁? 紙質は? 表紙の色は? ……」

【翻刻(ほんこく)】(文学)

①主に古い写本や刊本を翻字し直すこと、あるいはそのもの

②手書き原稿などをパソコンのテキストデータにすること

③「ノートとったんだけどいる?」「翻刻してちょうだい」

④「ノートとったんだけどいる? ついでにデートしない?」「汚い手書きは見たくないし解説も面倒くさいのでテキストデータにしてPCにメールで送って。直接話しかけないで」

【ウェスタン】(生物学)

①ウェスタンプロットティングの略。タンパク質分析手法のこと

②たまにファッションと間違える

③「ウェスタンってもう古いよね」「お、分かってるじゃん!」

④「タンパク質の分析といえば、マススペクトロメリーがキてるよね」「だよなー、やっぱ時代はカンカン帽だよなー!」

【縮退】(物理学、物理化学)

①異なる二つ以上の物理状態が同じエネルギー準位をとること

②異なる二つ以上のものが同じに見えること、区別がつかないこと

③島根と鳥取は縮退しているなんて言わないよ絶対

④島根と鳥取は区別がつかないなんてまさか言いませんよ、思ってもないですよ(樋口一葉👤)

【摂動(せつどう)】(物理学)

①ある系に対して加えられる小さい変更のこと

②無視してよいほど小さいもののこと

③あ! 締め切りおととிட்டったか! まー2日なんて摂動だよ! だよね? ですよね?

④宇宙の年齢は137億年と言われています。それに比べて2日=0.00000005476億年というのは非常に短い時間です。締め切りは2日過ぎましたが、何か?(南崎梓)

【N2だ(えぬにだ)】(実験系科学一般)

①該当する例が、2例目であるということ。例数のことをNと言います。同様に「N3だ」も可。実験は同じ操作を何回か行って、そのデータの平均を取って、他の操作をしたものと差が出るかを検討することが多いですが、統計にかけられるのは最低でもN3からで、一般にNが多い方が実験結果の正確さは増します。どれくらいのNを取るかは、手法、分野にもよりますが、生化学などでは少なく、N3になると、概ね論文になるようです
②これで二人目だ……など
③(誰かから意外なことを聞くのが二回目で)N2だ……
④自分にとって意外なことを知っていたり、やっていたりする人を見つけて、一人目では「そいつが珍しいのだろう」と思っていたのに二人目の該当者を見つけて、「これは、自分が知らないだけで、実は常識なのか?」と、少し動揺し始めるときに使う(菅野康太)

【インベントリー】(自然史科学、博物館学)

①ときに脈絡なしに、たくさんのもを収集、研究、継承する学術活動

②いわゆる物持ちや収集癖のある人間の行動とその規範

③あいつの下宿はインベントリー系だからな

④あいつの下宿には、足の踏み場もないほど、あまりにも多くの多彩な物品が置かれている(遠藤秀紀)

【史料批判】(歴史学)

①過去の事実をあきらかにするための証拠(史料)について、その性格を考慮して、正当に評価すること

②情報の信頼度を、発信した人や伝えた媒体の性格を考慮して、評価すること

③彼の言ったことを信じるなんて、史料批判が甘いね

④彼の情報の信頼度が低いことを、忘れていたね(高橋慎一郎)

【第一次近似】(物理学)

①モデルや現象のもっとも荒い近似

②おおまかなとらえ方

③あんまりいい言い方じゃないけど、第一次近似としてはそんなとこかな

④あんまりいい言い方ではないが、おおまかにはそんなとこかな(alltbl👤)

【相分離(そうぶんり)】(物理学、物理化学)

①二つ以上の異なる相状態に分離すること

②二つ以上の異なるものが混ざらないままにいること

③関東人と関西人が相分離している

④関東人と関西人が完全に別れている

【活性化エネルギー】(物理学、化学)

①反応の出発物質の基底状態から遷移状態に励起するのに必要なエネルギー

②ある行動を起こすのに必要なエネルギー

③最近、わたしの笑いの活性化エネルギーは小さい

④最近、わたしはちょっとしたことで笑ってしまう

【コンタミ】(実験科学一般)

①コンタミネーションの略。雑菌汚染(生物学)、目的物以外の化学物質の混入(化学)、つまり科学実験の場における汚染。また、試料に不純物が混ざること

②日常生活における雑菌汚染、また、仲間外れが混ざることにも拡張して使う

③(A)コンタミしたお箸は使わない方がいいよ

(B)英語のプリントにフランス語がコンタミしてしまった

④(A)落としてばい菌がついて汚染されたお箸は使わない方がいいよ

(B)やべ、英語とフランス語のプリントが混ざっちゃったよ

【多体問題】(物理学)

①三個以上の物体が相互作用により複雑な運動をする問題

②複数の勘案事項が複雑に絡み合っている様子

③このプロジェクトは多体問題になっているから整理が必要だ

④プロジェクトに複数の要素が複雑に関連している様子をさす(えのてい👤)

【サチる】(物理学、工学、理工学一般)

①ある一定の状態に達して変化しなくなること。計測可能範囲を超える(サチュレーション)

②いっぱいいっぱい気持ちになること、余裕がない様子。それ以上あがらなくなる

③(A)やるが多すぎて、完全にサチった

(B)進振り(進学振り分け)の点数がサチる

④(A)やるが多すぎて、もういっぱいいっぱいだ

(B)成績(進学先選択の評価基準となる、各科目の平均点)がもうあがらない(alltb👤、えのてい👤)

【律速】(化学、化学工学、物理学、物理化学、薬学、化学反応を扱う分野)

①律速段階。化学反応が複数のステップで進行するとき、もっとも速度が遅いステップのこと

②複数の作業工程があるとき、もっとも遅いステップのこと。また、集団や、段階にわかれた作業・行動をする際、一番おそい人・段階のこと

③(A)今日のサブウェイは、トーストが律速段階になって、長い行列ができている

(B)青春18きっぷで東京から名古屋へ行くとき、静岡県が律速段階である

④(A)今日のサブウェイは、トーストのところで時間がかかり、長い行列ができている

(解説)東大工学部2号館にもあるサンドウィッチショップ・サブウェイの魅力は、パンの種類やトースト、トッピング等を細かにオーダーできるシステムだ。複数のステップによりサンドウィッチが調理されてゆくが、ひとたび皆がトーストを頼みだすと、オープントスターの処理能力が追いつかなくなり、あつという間に行列ができてしまう。このトーストのように、一番遅くて、全体に影響するステップのことを律速段階という

(B)青春18きっぷで東京から名古屋へ行くとき、静岡県がもっとも時間がかかる

(伊與木健太、竹澤悠典、su319👤)

ACADEMIC JARGON in colloquial use

解説・用例　①用語の学術的な意味　②用語の拡張された意味　③用例　④用例の意味

【プリコラージュ】(文化人類学)

- ①限られた持ち合わせの雑多な材料と道具を間に合わせて使って、目下の状況に必要なものを作ること
- ②ありあわせ、ごちゃませ
- ③「今度の飲み会はプリコラージュしませんか?」
- ④「今度は閻魔にしましょうよ(わくわく)」

【カットオフ】(物理学)

- ①ある現象を説明する模型(理論)が適用可能なスケール(エネルギーやサイズなど)の上限。この上限を超えるスケールでは模型や理論が破綻する
- ③(授業中に)あの先生のギャグのカットオフは五名だね
- ④会話に参加する人数が五名までならギャグが通用するが、それをを超える大人数の前では全くギャグが受けないということ(高杉晋作👤)

【スレシヨルド】(物理学、生物学)

- ①しばしば～エネルギーとして用いられる。新たな反応モードが現れるために必要とされる、系のエネルギーの値(閾値)のこと。また、刺激がある値以上になると効果を発揮する、その強さの値のこと
- ③彼のスレシヨルドは生ビール二杯だね
- ④生ビール二杯以上飲むと、酔っ払って人格が変わってしまうという意味(酔鯨👤)

【コンバラ】(おそらく科学一般)

- ①対象の性質を示すある値が、複数の事なる対象物の間でほぼ等しいこと.comparable
- ③コンパ会場までいくのに、電車でもタクシーでもコンバラだ
- ④移動の所要時間が電車とタクシーの間で大差ない(吉田松陰👤)

【フィーディング・コンペティション】(生態学)

- ①採食競争。動物がエサの獲得をめぐるって同種他個体と競争関係にあること
- ②コンパや学会の懇親会などでおいしい食べ物

があっという間になくなること

- ③今日はフィーディング・コンペティションが激しい
- ④先生のふところが寂しいときのゼミのコンパはいつもより安い居酒屋になるので魅力的なメニューが少なく、ちょっとおいしいものが出てくるとすぐなくなる。また、学会の懇親会で主催者が明らかに費用をケチったと思われるときも、たちまち食べ物が枯渇する(佐倉統)

【インブリーディング】(生態学)

- ①近親交配。生物が遺伝的に近縁な個体と交配すること
- ②同じ研究室やゼミの内部で男女が仲良くなること
- ③あのラボはインブリーディング率が高いよねー
- ④「学生や研究員の男女間の仲がよい、和気藹々とした研究室である」という良いニュアンスと、「研究よりも不純(?)異性交遊にうつつつを抜かしているひでえラボだ」という悪いニュアンスの両方がある。後者は、ときに、男性しかないラボからのやっかみを反映している(佐倉統)

【ロスる】(生物学など)

- ①容器を移し替えるとき等に、ピペットや容器の壁面に液がへばりついたりして工程を経るごとにもとあった量より最終的な量が減ること。グリセリン等、粘度の高いもので起きやすい。例えば五回実験したくて必要量用意した筈なのにが、ロスった為に五回目で試薬が微妙に足りなくなったりする
- ②日常用語でも、同じ意味で使ってしまう
- ③(使い終わった調味料のチューブなどをみて、心の中で)うまく搾らないと、ロスるな……

*歯磨き粉とか、カップ麺のタレとか、粉薬とか、きっとロスってますよ

 - ④もったいない(菅野康太)

【有意】(科学一般)

- ①有意差とは、統計的に意味のある差のこと。データがばらついていると、一見平均値のグラフからは差があるように見えるが、統計検定をしてみたら有意差が無いこともある。グラフだけをみ

て、差があると思っはいけない

- ②同じ意味
- ③「○×大学の人って▲□だよね～」のような発言に対して、「それって有意なの?」
- ④(自分の数少ない経験からくる)印象だけで決めつけてない?(菅野康太)

【レイノルズ数】(物理学、流体力学)

- ①流体中の慣性力と粘性力との比のことで、粘性を持つ流体を特徴づける量。この値が低いほど粘性効果が高い
- ②サラサラはレイノルズ数の値が高い、ネバネバは値が低い
- ③お前の血はレイノルズ数が低い
- ④お前の血はネバネバしている(西成活裕)

【受容体】(生物学、医学)

- ①外界のシグナル物質(ホルモン(個体内)やフェロモン(個体間))を細胞が受容する際に使うタンパク質。シグナル物質と受容体はカギと鍵穴の関係
- ②外からの刺激を感知する能力
- ③KYの人にあの人は受容体がない……などなど
- ④周囲の雰囲気を受容する能力がない(武田洋幸)

【ファサード】(建築学)

- ①建築物の顔と言える部分(正面から見た外観)
- ②建築の外観一般
- ③この建築はファサード建築だ
- ④表層だけの建築という意味(隈研吾)

【指数関数的】(数学)

- ①数が累乗で増えるさま
- ②量が爆発的に増加するさま
- ③twitterでフォロワーが指数関数的に増えた
- ④twitterでフォロワーが爆発的に増えた(su319👤)

【デカップル】(宇宙論)

- ①我々の宇宙は一点から始まり現在に至るまで膨張し続けていると考えられている。高温高密度の初期宇宙では様々な素粒子同士の相互作用が起こっていた。ある特定の相互作用の反応速度より宇宙の膨張速度の方が大きくなると、その相互作用しかしない素粒子は他の素粒子との相互作用から孤立することになる。これを相互作用の凍結、またはデカップル(decouple)という
- ②相互作用(=会話)する集団から抜けること
- ③山田さんデカップルした
- ④あら、山田さんついてきてるかと思ったら抜けてるし!(南崎梓)

【文法】(言語学、脳科学)

- ①母語話者の脳にある言語知識であり、単語および文の生成や理解に必要な規則の体系。人間の言語に共通した普遍文法の原理と、個別言語のパラメーターより成り、言語環境において乳幼児が特別な教育なしに獲得できる
- ②言葉の正しい使い方に関する規則。動詞の活用規則がその典型で、日本語動詞の五段活用や、三人称・単数・現在で英語動詞に"s"がつく例などが有名。国文法や英文法のように、文法は学校教育で習うと思われる
- ③ドイツ語の文法は難しい
- ④ドイツ語の言葉の正しい使い方に関する規則は、大人になって習得しようとするど骨が折れる(酒井邦嘉)

【カリスマ】(政治社会学、宗教社会学)

- ①神の賜物。とりわけ、指導者がかもつ神秘的な力。また、その人物
- ②特別な力をもった職人、技術者、芸人
- ③カリスマ美容師(店員、教師)
- ④きわだった才能をもち、多くのファンがいる美容師(店員、教師)(島蘭進)

【コンファイン】(物理学)

- ①閉じ込めの意。陽子や中性子を構成する素粒子と考えられているクォークは単独では観測さ

れない。その理由が、クォーク同士が、遠くになればなるほど強く引き合う(ゴムとかバネみたいな)「強い力」で結びついていて必ず三つまたは二つセットになっているからだとする理論をクォークの閉じ込め(quark confinement)という

- ②誰かにがっつり捉えられる様
- ③山田さんはおぼさま軍団にコンファインされてるから先行こう
- ④長時間会話を途切れさせせない能力に長けた年長のご婦人方が山田さんとの会話を楽しんでいるから、もう救いだせないよ

【インタラクション】(物理学、特にここでは素粒子物理学の場合を記す)

- ①相互作用。二つ以上の粒子もしくは物質が互いに力を及ぼし合うこと
- ②二人以上の人がなんらかの交流をすること(主に直接会って話すこと)
- ③Aさんとは同じ建物にいるけど、インタラクションはない
- ④Aさんとは同じ建物にいるが、会ったり話したりしない(金畑喜美)

【キャンセル】(理系全般)

- ①相殺すること
- ②そのまま
- ③塩辛のにおいとドリアンのにおいがちょうどキャンセルして、もはや無臭だ!
- ④それぞれ強烈な臭いを放つ、塩辛とドリアンの臭いがちょうど打ち消しあって、もはや無臭である(ちよっと無理のある用例ですかね)(南崎梓)

【ローカルオプティマム】(応用数学)

- ①最適化問題において、局所的にはベターだが大域的にはベストではない状態。局所最適解
- ②なぜベストを尽くさないのか、井の中の蛙
- ③僕らの関係は社会的な制約のためにローカルオプティマムに陥っている。二人で人生のグローバルオプティマムを目指さないか?
- ④結婚 or 付き合ってください(竹内孝)

【レゾリューション】(情報処理)

- ①画像やカメラの解像度
- ②話の詳しさ
- ③レゾリューション上げよう!
- ④詳しく教えて!

【廃液】(物理学、化学、生物学)

- ①実験で使用し、不要になった試薬
- ②不要な液体
- ③飲みきれなかったビールは廃液で
- ④飲みきれなかったビールは捨てていて

【分散】(確率、統計学)

- ①確率変数が、平均値からどれだけ離れた値を取るかを示す指標の一つ
- ②主にバラツキ度合いの大きさを嘆きたい時に使う
- ③Aさんと待ち合わせると、到着時間の分散大きいよね
- ④Aさんと待ち合わせすると、時間前に来ることもあれば、大幅に遅れてくることもある(竹内孝)

【不履行】(法学)

- ①ここでは債務不履行の略。債務者が契約等に基づいて発生した債務を履行(弁済)しないこと。民法第三編第一章第二節第一款に詳しい
- ②やるべきことをしないこと
- ③「すみません、資料持ってくるのを忘れました…」「…君、最近不履行多すぎじゃない?」
- ④「すみません、資料持ってくるのを忘れました…」「おまえ、だめだなー!」(M.K👤)

【逮捕】(法学)

- ①直接に人の身体の自由を拘束すること。逮捕罪。刑法220条:不法に人を逮捕し、又は監禁した者は、三月以上七年以下の懲役に処する
- ②お互いの手を繋いでいること
- ③「井上が加藤を逮捕してたぜ」「まあ、当然違法性は阻却されるだろうな」
- ④「井上と加藤が手繋いで歩いてたぜ」「ずっと付き合ってるよね。仲イイよね」(M.K👤)

A

宗方姉妹

[宗方姉妹 / DVD発売元:東宝 / ¥5,040 (税込)]

松原隆一郎 (社会経済学、関連社会科学)

私は消費経済の研究をしています。映像は消費社会をイメージとしてとらえることのできる媒体であるため、1970年代は『岸辺のアルバム』、80年代バブル期は『東京ラブストーリー』を見るよう学生に指示しています。小津の諸作品も趣味の良い食べ物、アパートのモダンな間取り、洒落たバーの看板等でかつての消費のシーンをみせてくれますが、私は本作で、セリフによっても消費社会の本質を示すことができると理解させられました。

『宗方姉妹』で活発な妹(高峰秀子)は戦後日本ではじけるように出現した流行を追いかけますが、これに対し、古風な姉の田中絹代はこう述べます。「あなたのいう『新しい』ってのは、赤いマニキュアを塗りたいってことじゃないの? でも、そんなことは一日経ったら古くなってしまう。私の考える『新しい』っていうことは、古くならないことなの」と。日本が目指すべき、落ち着いた消費社会を言い表した言葉だと思います。

B

スター・トレック

[スター・トレック® デレクターズ・エディション特別完全版(1枚組) / DVD発売元:パラマウント / ¥1,500 (税込)]

中須賀真一 (宇宙工学、知能工学)

宇宙大作戦という名前で日本でもTV放送されたスター・トレックの映画版の第一作である。強大な力をもった謎の知的物体が地球に接近し脅威を与え始めた。それを調査に向かったUSSエンタープライズ号が突き詰めた真実は……地球を20世紀に離れ「知的探求」という「目的」を与えられて宇宙を数世紀にわたり探索し続ける過程で、その目的をより達成するために様々なセンシング能力・エネルギー獲得能力を含め強大な力を自律的に身につけていった宇宙探査船「ヴィジャー」が、最後の知的探求として自分の

創造主(つまり人類)を調べに来たのだった。機械に与えた「システムの目的」が、その目的をより高度に達成するために自分自身を作り変える原動力となったというその姿は、究極の人工知能、機械学習の像として、また、システム目的の重要性を強く示唆するものとして強烈な研究のモチベーションを与えてくれた。

C

十二人の怒れる男

[十二人の怒れる男 フォックス・ムービー・レジェンド WAVE2 / DVD発売元:20世紀フォックス ホームエンターテイメント ジャパン / ¥1,490 (税込)]

池田謙一 (社会心理学)

ヘンリー・フォンダ主演のこの映画は、日本で始まった裁判員制度の視点からも興味深いものです。12人の陪審員が殺人の被疑者となった被害者の息子の嫌疑を判断するのです。全員一致で有罪と決まれば電気椅子送りとなる法の規定の中で、たった一人有罪に疑問を投げかけたフォンダが事件の証拠を一つひとつ吟味していくドラマは、まさに必見です。社会の変化は少数派がいつか多数派となることで生じるのですが、それがどんな形で可能か、この映画ではそうした少数派による多数派説得過程の社会心理的メカニズムさえ活写しています。私は社会のリアリティというテーマの授業でいつもこれを紹介します。何が本当のことだと判断されるのか、という社会的な合意の揺らぎと再形成がここに現れているのです。これは広い意味で現在の研究の基本テーマになっています。

D

ベルリン・アレキサンダー広場

[Berlin Alexanderplatz / DVD発売元:Criterion (国内未発売)]

白石さや (比較文化人類学)

ライナー・ヴェルナー・ファスビンダーが、1920年代ベルリンのアレキサンダー広場を舞台とする小

説から製作した。人々に愛されたアレキサンダー広場(映画製作当時は東西分割の象徴的存在として見る影もなかった)が、時間と記憶のからみ合う、目眩くような、不可思議な活気のある空間として描かれる。

衝撃的だったのは映画製作の文法(あるいは文法の破壊)である。2階の部屋に男を残して、彼女がドアから出ていく…残された男が視線を窓に向ける…窓の下の1階のドアが広場に開き、人が出てくる……そこから出てくるのは彼女ではなく、窓を見下ろしている(と思われた)男自身であり、すでに数日が過ぎている。こういうシーンに出会うと、正面から映画の文法と向き合うことになる。これまでに見てきた映画はどのような約束事によって創られていたのだろうか? そういう力を持つエスノグラフィを書きたいものだと思った。

E

借りぐらしのアリエッティ

[借りぐらしのアリエッティ / 公開中 (DVD未発売) / ©2010 GNDHDDTW]

佐々木正人 (教育認知科学、生態心理学)

研究テーマは知覚です。例えば誰かを見ながら、同じ人の声、咳払い、足音、衣服の立てる音などをよく聞くと、見えと音の協調に「性格」があらわれています。知覚は感覚の編集なのです。この夏、ジブリの「借りぐらしのアリエッティ」を見ました。床上の家に物を「借り」る、10分の1サイズの床下少女。画面には「小人の音」と、そうではない音がありました。小人でないのは声。平均男性の声帯は約20ミリで、女性が16ミリ。数ミリ差でこの男女差が生じているのですが、アリエッティは一貫して普通サイズの女性声でした。雨音、虫の音、柱時計の音などは、時々、小人にはそう聞こえるだろうというような、大きな音量でした。二つのサイズの人の聞こえの両方が画面にあるので、見ていると、時々、自分も小人になった気分がしました。観客の知覚がたまに小人サイズになるように仕組まれていたわけです。知覚の共有が他者理解をもたらすことにあらためて気づかされました。

F

愛を読むひと

[愛を読むひと <完全無修正版> / DVD発売元:株式会社ショウゲート / DVD販売元:20世紀フォックス ホームエンターテイメント ジャパン / ¥3,990 (税込)]

白波瀬佐和子 (社会学)

私が専門とする社会学は、国・社会をマクロと捉え、その社会を構成する一人ひとりをミクロな次元として両者を位置づけます。社会の諸制度は個人を守ることを原則としますが、国や社会という枠組みは個人にとって残酷にもなります。その現実をつきつめた映画として、The Reader (邦題「愛を読むひと」)をご紹介します。

1995年ドイツ人作家B. Schlinkによる同名小説を、S. Dadry監督が2008年映画化しました。時代は第二次大戦直後のドイツ。年上の女性ハンナとひと夏の恋に落ちたマイケルが彼女に再会したのは、ナチス・ドイツ強制収容所での大量虐殺を審判する法廷の場。ハンナには、決して誰にも知られたくない秘めごとがありました。それを守り抜くことが彼女のプライドであり、戦中を生きた一人の女性の時代や国に対する精一杯の抵抗でもあったのです。

G

ナッシュビル

[Nashville / DVD発売元: Paramount Studio (国内未発売)]

藤原帰一 (国際政治、東南アジア研究)

研究は仕事だけど、映画は人生そのもの。映画に研究の示唆を受けた経験はないけれど、と

てもかavanaughという思いに襲われた映画はある。そのひとつが『ナッシュビル』。アメリカの地方都市で行われたイベントを舞台に、総勢24人の群衆劇によってアメリカの心臓をつかみだしたロバート・アルトマン監督の傑作だ。そこに展開されるのはケネディ暗殺とベトナム戦争に揺り動かされた60年代末期から70年代初期のアメリカの風景。作り手の主観によって裁断することなく、ポップなアメリカと古風なアメリカ、その新旧の衝突が生み出す混乱と不安を見据え、政治学の業績などよりもずっと的確にアメリカ政治のかたちを捉えている。最初に見たときにはひたすら悔しく、いま見返しても悔しかった。どうして悔しかった? 私が作ったものじゃないからです。

H

機動戦士ガンダム

[ガンダム 30th アニバーサリーコレクション 機動戦士ガンダム I / 特別版 / DVD発売元:バンダイビジュアル / ¥3,000 (税込)]

岡部徹 (マテリアル工学、レアメタル製錬)

初期の機動戦士ガンダムのモビルスーツの装甲は、ルナチタンという超高強度のレアメタル合金でつくられている。この合金は、ルナ2というアステロイド基地で採掘されたチタンに、レアアースなどを加えて製造した特殊合金である。また、最近のガンダム00(ダブルオー)では、レアメタルと情報産業の繁栄によって中東で最も豊かなスイール王国という未来国家が舞台の一つとなっている。この歳になってもビデオ屋でアニメを何枚も借りてきて観ていると、「オタク」と家内から呆れられることが多い。しかし、私は、

ただ遊んでいるだけでなく、「超」オタクを目指して研究しているのである。「未来材料:チタン・レアメタル」という看板を掲げて、地道に20年間、延々とレアメタルのオタク研究を続けてきたが、SFのアニメを観ていると、将来さらにレアメタルが重要となることを確信する。今、上映されているガンダム00も、早く観に行つて研究しなくては……。

I

崖の上のポニョ

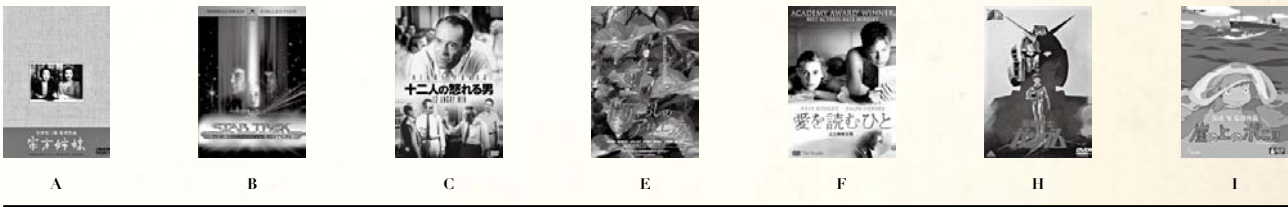
[崖の上のポニョ / DVD発売元:ウォルト・ディズニー・ジャパン / ¥4,935 (税込) ©2008 二馬力・GNDHDDTW]

馬場章 (デジタルコンテンツとアーカイブ研究)

『崖の上のポニョ』は、ジブリの他の作品のどれよりも私が親近感を覚える作品だ。その理由は、この作品のプロデューサーである鈴木敏夫さんが、本作品の制作中に私の身近にいらっしやっただからである。鈴木氏は、当時、大学院情報学環のコンテンツ創造科学産学連携教育プログラムの特任教授をされていた。

アニメ表現の極限に達した前作『ハウルの動く城』に対して、本作品は、宮崎監督にとって原点回帰の作品になったという。ところが、講義中の鈴木氏は、アニメビジネスに対するあらたな挑戦の言葉を常に語っていらっしやっただ。

無から創造性は生じない。一見すると別の方向を向いているように見えた監督とプロデューサーが協力して、本作品を完成させた。本作品は、私に、人と人との関係性の上に成り立つ創造性の本質的なあり方に気づかせてくれたのである。



博士の映画な愛情

—— または私は如何にして映画から学問に影響を受けたか

研究者が、本や論文、実験や調査から研究のインスピレーションを受けるであろうことは想像に難くないでしょう。

しかし、映画から研究のヒントが得られることもあるのでは? そんな仮説のもと、学問と映画の様々な出会いを紹介します。

構成 / 佐藤悠・徳久宗平

Dr. Strangelove

or: How I was Influenced by Film in my Research

Books to shake your confidence!

The poisonous book guide.



1

1
イワン・イリッチの死

Lev Nikolajevich Tolstoj著 米川正夫訳 岩波書店刊

死を眼前にして、自ら確かなものをもたないという底知れぬ恐れを刺激し、己を問い直さざるをえない気にさせてしまう。宗教学と死生学の双方にとって劇的な書物といえるだろう。(島蘭進)

2
老いの泉

Betty Friedan著 山本博子・寺沢恵美子訳 西村書店刊

歳をとるということは心身の機能が衰え、社会とのつながりを喪失していく過程にあるというイメージを持つ人は多いと思う。高齢者の研究(老年学)でも従来そのような高齢者像が当然と考えられていた。しかし、1980年代に至り、少数ではあるが心身の機能の衰えが少なく、社会的にも活動的な高齢者がいることが指摘され、successful aging(幸福な老い)という概念が提唱された。その後、同じ暦年齢であっても、衰えの激しい人と衰えのほとんど見られない人の両極端があり、大多数を占めるその中間層も含め、老化の過程が実に多様であることが次第に明らかになってきた。本書は1994年に出版され、老年学における高齢者のステレオタイプに痛撃を与え、また一般社会からも驚きをもって迎えられた。(特に邦訳は)決して読みやすい本ではないが、超高齢化社会を迎える日本にとって、いまだ重要な示唆を与え続けるものである。(甲斐一郎)



3

3
神々の沈黙——意識の誕生と文明の興亡

Julian Jaynes著 柴田裕之訳 紀伊國屋書店刊

「人間の意識はいつ、どこから生まれたのか」という問いに対して、比較心理生物学者ジェインスは、意識はほんの約3000年前、言語発生のはるか後に生まれたという驚くべき仮説をのべる。「人間は意識をもつ理性的生物」という近代的常識にとらわれた我々に、人間観の根本的変容をせまる本。(西垣通)

4
京都・一五四七年

今谷明著 平凡社刊

戦国時代の京都をえがいた『上杉本 洛中洛外図屏風』という絵について、いつえがかれたかを推理した研究書。絵のなかの建物について、徹底的に調べた結果、絵のとりの京都のすがたは、1547年7月16日からわずか16日間にしか存在しえなかった、という驚くべき結論を導き出す。直感的に、「そんなことはあり得ない!」と思うのだが、では、どうやってこの本の論理をうち破ればよいのか?これは、ぜひみなさんも考えてみてほしい。(高橋慎一朗)

5
記憶術

Frances A.Yates著 玉泉八州男訳 水声社刊

本書はルネサンス研究者のあいだでは名著とされているが、その現代的な意義は一般にはまったく知られていない。森羅万象の知識を秩序立てて記憶し、それをメカニカルな操作で想起するという西洋古来の発想は、現代の人工知能



6

6
ことばの起源 —— 猿の毛づくろい、人のゴシップ

Robin Dunbar著 松浦俊輔・服部清美訳 青土社刊

著者は、人間の心の進化を研究する人類学者である。猿の毛づくろいは群れのなかで親密な関係をつくるが、人間ではオシャベリがその代用となり、言語が生まれたという。さらに、人間の群れの規模は、脳の容量から約150名が基本だという。これら斬新な仮説から、人間という生物の原型イメージを鮮明に浮かびあがらせる本。(西垣通)

7
コンピュータと認知を理解する——人工知能の限界と新しい設計理念

T. Winograd, F.Flores著 平賀謙訳 産業図書刊

コンピュータによる自然言語理解研究の世界的権威ウィングラードが、突然それまでのアプローチを自己否定し、「コンピュータは絶対に人間の言葉を理解できない!」と断じた書物。ハイデガー哲学とオートポイエーシス理論にもとづく徹底的批判は、鉄腕アトムを夢見る人工知能学者に冷や水をあびせた。(西垣通)

8
The Music of Life

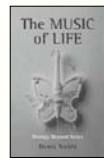
Denis Noble著 Oxford University Press刊
Cover ©Oxford University Press

人間がCDで音楽を聴いて感動するのを見た異星人はその理由を知るためにスピーカーから

あなたの選択をゆるがす! 劇薬書ガイド

読み終える頃には、あなたの価値観はまったく変わってしまっているかもしれない。我々はそれを「劇薬書」と呼ぶ。そんな著作を今回は各研究室の書棚から紹介しよう。独特の副作用には、くれぐれもご注意を。

構成/泉真沙子・菅原慶子



8

アンプ、読み取りヘッド、CDへと廻りついにCDに刻まれたデジタル信号に全ての原因があると結論づけます。システム生物学の創始者の1人であるノーブル教授はこのような話から始め遺伝子の解説に代表される要素還元主義的なアプローチだけでなく遺伝子、タンパク、細胞、臓器という様々なレベル間の相互作用からなるシステムとしての見方が生命を理解するために重要であるということ音楽に関連した比喩を用いて説いていきます。専門的な話、用語はほとんど含まれないため気楽に読みながら新しい生物学の方向を知ることができます。(杉浦清了)

9
死霊

埴谷雄高著 講談社刊

戦後文学最大の奇書。著者は獄中で最初の着想を得たが、そのさい作者がじつは発狂していたのではないかという説(鶴見俊輔)もある。宇宙の存在が過誤に満ちており、人類はほんとうは死滅すべきではないのか、と考えさせられる。(熊野純彦)

10
社会契約論

Jean-Jacques Rousseau著 桑原武夫・前川貞次郎訳 岩波書店刊

自然状態に生きる人々が、生命と財産を共同で守るために国家を樹立し、しかも自然状態と同じ自由を享受しうるためには、当初の社会契約はいかなる内容のものでなければならないかを分析する書物です。最初から最後まで読む人が少ないこともあって、これがトンでもない本であることは、あまり世に広く知られておりません。(長谷部恭男)



10

11
14歳

椋岡かずお著 小学館刊

鶏肉製造工場で肉片から生まれた鶏人間の天才科学者チキン・ジョージをはじめとして、著者特有の進化思想を爆発させた奇想天外にして深遠な漫画。いささか無茶苦茶で度肝を抜く展開を遂げる作品だが、その想像を絶した結末は、実は媒因進化論のごく論理的な帰結なのである。(田中純)

12
種の起源

Charles Robert Darwin著 渡辺政隆訳 光文社刊(光文社古典新訳文庫)

現代進化論の元祖となった古典ですが、要するに神はいないという結論を導き出したわけで、ヨーロッパ社会の知的基盤を覆すという社会的大変革のきっかけとなりました。その他、物事の見方やとらえ方についても革命的な転換をもたらした一冊です。(佐倉統)

13
進化の運命

Simon Conway Morris著 遠藤一佳・更科功訳 講談社刊

進化の本は多く読んできたが、この本は一味違う。コンウェイ=モリスはプロの基礎研究者ならば誰もが認める大御所だ。とりわけカンブリア紀に関する彼の諸説は有名である。700ページを超す本書で著者は、広範に渡る知識を駆使しながらブルドーザーのように猛進する。決して過熱はしないこの書き方は「学識者」という言葉がぴったりくる。そんな科学者気質



11

は、膨大な脚注を見てもよくわかる。進化に興味のある人は、本書のキーワードである「収斂」という概念は知っておくべき。ただし、この本を楽しむために、譲ってはいけな姿勢がある。「進化に関する学説はすべて仮説である」と念頭に置くことだ。もはや過去のことは検証しようがない。しかも一回しか生じなかった「再現性」のない事象を扱う。それが進化生物学だ。だから宗教的教義や非科学的盲信が入り込む。つまりコンウェイ=モリスのように「ヒトは必然的に生まれたのでは」と考えてもよいし、あるいは論敵グールドのように「ヒトは偶然生まれた」と考えてもよい。それはスタンスの違いとしかいいようがない。そして、そのスタンスから「解釈」が生まれる。それが進化生物学という学問なのだ。(池谷裕二)

14
身体化された心 —— 仏教思想からのエナクティブ・アプローチ

Francisco J. Varela, EvanThompson, Eleanor Rosch著 田中靖夫訳 工作舎刊

オートポイエーシス理論の提唱者として知られる理論生物学者ヴァレラが、「身体から創出する心」の謎に挑んだ書物。従来の認知科学のアプローチを全面否定し、脳科学に仏教思想(大乘仏教中観派)を重ねあわせる離れ技はすごい。(西垣通)



15	18	20
Syntactic Structures	世界屠畜紀行	胎児の世界
Noam Chomsky著 Mouton de Gruyter刊	内澤月子著 解放出版社刊	三木成夫著 中央公論新社刊

人間の言語の創造性と普遍性を明らかにすることで古典心理学を打破し、言語学・哲学のみならず脳科学や認知科学にコペルニクス的転回を与えた書。私の研究分野に関する書籍で、最も価値観や考え方を揺さぶるような、学術書、知的な書籍であり、学術界を震撼させた書籍の典型と言える。(酒井邦嘉)

16	18	20
真理と解釈	世界屠畜紀行	胎児の世界
Donald Davidson著 野本和幸・植木哲也・金子洋之・高橋要訳 勁草書房刊	内澤月子著 解放出版社刊	三木成夫著 中央公論新社刊

アメリカ分析哲学の「最後のスーパースター」の一人の著。フランスやドイツ、イタリアの現代思想や哲学にくらべて派手さはないが、派手でないぶん、淡々と語られる「解釈」や「コミュニケーション」についての根元的な分析は、読む者をぐいぐい引きこんでいく。語る言葉の即物性と、語られる内容のラディカリズムは、分析哲学という文体の本質的な「凄味」を表現するものであった。デリダよりネグリよりフーコーより、デイヴィッドソンの哲学的ラディカリズムは徹底されたものだったと思う。クールな知性によって、ホットでラディカルな内実を示すという点では、彼の師匠筋にあたるクワインの「ことばと対象」と双璧をなす著作である。(北田暁大)

17	18	20
精神現象学	世界屠畜紀行	胎児の世界
Georg Wilhelm Friedrich Hegel著 長谷川宏訳 作品社刊	内澤月子著 解放出版社刊	三木成夫著 中央公論新社刊

原書は、西洋哲学史上の奇書。そこで主張されていることからのほとんどすべてが間違っていたとしても、なお魅力を失わないとされる古典。在野の哲学者である長谷川宏氏の新訳は、それ自体この国のヘーゲル研究者に対して正負の衝撃を与えた。(熊野純彦)

18	20
世界屠畜紀行	胎児の世界
内澤月子著 解放出版社刊	三木成夫著 中央公論新社刊

ことは単純である。地球の至る所で、生きている動物が肉になるまでの話だ。屠畜を文字に力強く投射できる人間は、その場に居合わせている者だけだと、私は確信をもつ。文字に加えて、プロとして製本技量をも磨いてきた著者の、自らの手による描画が読み手を惹き込む。紙面が「生」を淡々と見据えているのだ。イデオロギーの如何を問わず、命を屠る空間は、通例社会から、汚く、おどろおどろしく、ふれがたく、間違いなく反エリート的な殻を被されてきた。だが、著者はその空気を愛し、その姿を沈着冷静に受け止めて、文字と絵に換える。遺体の学を標榜する私は思った。「命と死の境界を文化として語り得る稀有な著者に、いま出会えた」と。(遠藤秀紀)

19	20
組織化の社会心理学 第2版	胎児の世界
Karl E. Weick著 遠藤雄志訳 文眞堂刊	三木成夫著 中央公論新社刊

ワイクの『組織化の社会心理学[第2版]』は米国の経営書ベストテンに入ったりする本である。しかし、ゼミでも何度か読んだが、難解を通り越して、学生たちの評判は最悪。引用元まで遡って調べた学生が、引用されている図が間違っていることに気づき、ワイク自身も理解していないのではないかと憤慨するシーンも。1969年の初版と比べ、1979年の第2版は分量がほぼ3倍近くに増え、冒頭にも10個のエピソードが足されているが、まるで禅問答の類。実は、全体を通読してから読み直すと、解釈の仕方が全く違っていったことに気づき唾然とする。裏を返せば、まったくイントロの用をなしていないわけで、通読して理解した人が、はたして何人いるのやら。(高橋伸夫)

20	22
胎児の世界	探究I
三木成夫著 中央公論新社刊	柄谷行人著 講談社刊

解剖学者が胎児に見いだした生命進化のヴィジョン。三木によれば、受胎32日目の胎児の顔には古代魚類の、34日には両棲類の、36日には原始爬虫類の、38日には原始哺乳類の「おもかげ」が宿るといふ。独特な文体と自筆の解剖図によって展開されるこの「生命記憶」の世界は、実証性の境界を見失わせるほどに魅力的だ。(田中純)

21	22
玉勝間	探究I
本居宣長著 岩波書店刊	柄谷行人著 講談社刊

江戸時代における日本古典解釈の代表的書物、といえば余りにもありきたりな評価かも知れない。しかし、そこに執拗に現れる儒学と華夷思想、すなわち「漢意（からごころ）」への糾弾の語られ方は、今日も繰り返される東アジアのナショナリズム対立と直結する。読後には、マッチョな「愛国」に染まる自分と、それを冷静に相対化しようとするもう一人の自分への分裂という副作用が永く残るだろう。(平野聡)

22	24
探究I	ドリアン ―― 果物の王
柄谷行人著 講談社刊	塚谷裕一著 中央公論新社刊

アカデミックな意味でのワイトゲンシュタン解釈としては相当異端な部類に属するが、クリプキの独創的なワイトゲンシュタイン解釈を、さらに独創的・思想的に再構成したものとして、日本のコミュニケーション思想にも少なからぬ影響を与えた。哲学的な解釈研究の地平を逸脱したという点では問題なしとはいえないが、ワイトゲンシュタインの規則論を専門的な哲学者の外にも聞き、さまざまな思想的想像力を喚起したという点では重要な著作。(北田暁大)

23	24
茶の本	ドリアン ―― 果物の王
岡倉天心著 講談社刊	塚谷裕一著 中央公論新社刊

20世紀近代建築の巨匠と呼ばれるフランク・ロイド・ライトが、この本を読んで2週間、ショックのあまり仕事が手につかなかったというエピソードを読んで、この本に興味を持った。ライトはショックを受けただけではなく、天心と安藤広重から大きなインスピレーションを得て、20世紀建築の扉を開いた。流動的空間、内外が融け合う空間の原点が天心と広重にあったのである。近代建築運動の根っこが、実はこの本にあったという事は是非確認して欲しい。天心は英語が話せるなら、和服を着て海外に行けといった。事実この本は英語で書かれたがゆえに、ライトを動かし、世界を動かした。翻訳ではなく、原文の英語で読むことを強くすすめる。(隈研吾)

24	25
ドリアン ―― 果物の王	日本のルイセンコ論争
塚谷裕一著 中央公論新社刊	中村禎里著 みすず書房刊

一見平凡な、果物についてのカラー新書だ。しかし異様な形をした、異臭を放つ奇果、せいぜいお笑いのネタとのみ思われがちのドリアンについて、その秘められた真実を説くところ、それも芳醇な香りに満ち、甘くクリーミーな味を宿した、文字通りの果物の王であると秘中の秘を明かす点、秘薬を説く中世の魔書にも似る。ほんの数年前にはかのマンゴーも臭い果物と言われていたことを思い出させ、古くはパイナップルも赤痢を引き起こす魔の果実と恐れられていたことを掘り起こし、ドリアンにまつわる数々の神話が、これらと軌を同一にすることを示す。マンゴーの次にはドリアンの時代がやってくると予言するところ、マラーの次はブルクナーの時代だと予言された前世紀末を思わせる。(塚谷裕一)

25	26
日本のルイセンコ論争	背信の科学者たち
中村禎里著 みすず書房刊	William Broad, Nicholas Wade著 牧野賢治訳 講談社刊

ルイセンコはソ連の遺伝学者で、まだ遺伝子の実体が解明されていなかった時代に「後天的に獲得した形質も遺伝しうる」という説を唱えてメンデルの遺伝学を否定し、これが個人の努力の推奨に有効なことから社会主義圏を席卷した。今はすっかり忘れ去られてしまっているが、当時は日本でも多くの学者がこの説に賛同し、大きな論争があった。本書はその過程を克明に記録した本である。地球温暖化やダイオキシン問題を見ても、真実に迫る研究技術が不十分なときに政治的に見て意義のある学説が提唱された場合、科学者がどう対処すべきかを考えるとき、この歴史の教訓は今でも他人事ではない。チェコでは、ルイセンコ説が支配的だった時代にメンデルが研究を行った修道院も荒廃し、実験に使ったブドウの木も枯れてしまった。現在は戦前に東京大学植物園に株分けされていたメンデルのブドウの木が本家に再移植されて、里帰りしている。(伊藤啓)

26	28
背信の科学者たち	ぼくんち
William Broad, Nicholas Wade著 牧野賢治訳 講談社刊	西原理恵子著 小学館刊

科学発見の一番乗りを目指すあまり、捏造やデータの意図的選別をしてしまった数々の著名科学者たち。高校生時代、この世界では野口英世がその代名詞と知って衝撃を受けた。が、読み進めるうちに、ミリカンの油滴の実験もまさにその典型例で、当時の科学水準では、データの選別なくしてはあの発見に至れなかったことを知ったとき、科学の進歩のためには捏造も「可」なのかと、価値観が揺らぐのを覚えた記憶がある。とんでもない奇説が原因で、科学が回り道を強いられることがあることを考えると、それは「不可」なのだが。(塚谷裕一)

27	28
鼻行類	ぼくんち
Harard Stumpke著 日高敏隆・羽田節子訳 平凡社刊	西原理恵子著 小学館刊

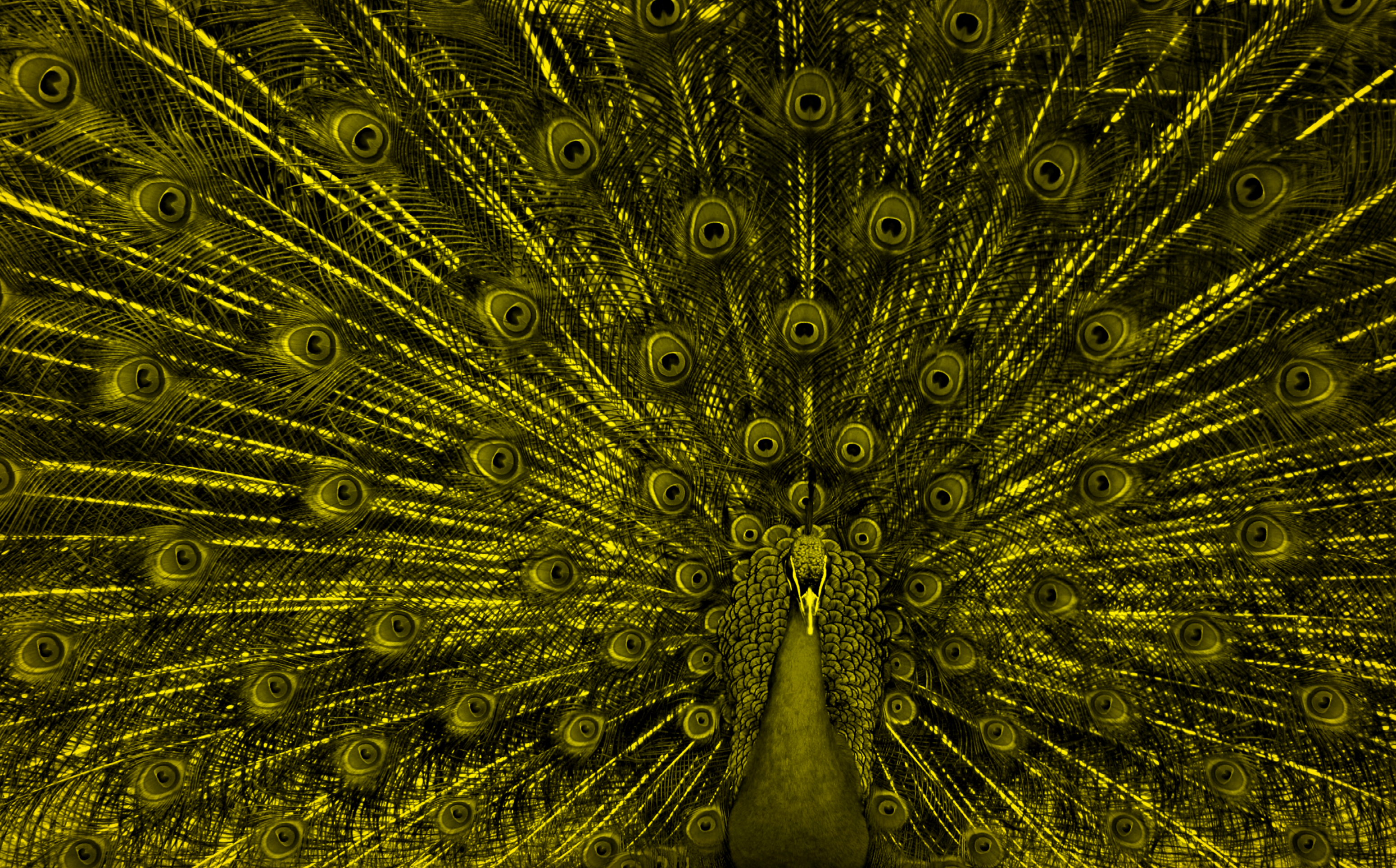
鼻を使って移動するという架空の生物類について、大まじめで形態や生態を論じたパロディ。実在すると思って探検旅行を計画した人が、いるとか、いないとか。(佐倉統)

28	29
ぼくんち	無縁・公界・楽(増補)
西原理恵子著 小学館刊	網野善彦著 平凡社刊

人間が生きてゆくためには、最低限なが必要なのか、人間がどのような場合でも犯してはならない過ちはなにか、他者を受容し、愛するとはどのようなことか、絶望とはなんであり、希望とはなんであるか、について深く思いを馳せることができる。(熊野純彦)

29	33
無縁・公界・楽(増補)	日本中世史の本
網野善彦著 平凡社刊	田中幸彦著 講談社刊

日本中世史の本ですが、年代順に記述されているわけでもなく、特定の事件や合戦をとりあげているわけでもありません。「これが歴史の本?」と思わせるスタイルで、さまざまな事例から中世の「自由」の事態に迫ります。出版された時にも大きな衝撃を受けましたが、現在でも必読の書といえます。タイトルがまた刺激的で、この本のあとばらくは、「××・××・××」といった、用語を3つならべたタイトルの本や論文がはまりました。(高橋慎一郎)



変わりゆく、関係性の態様

構成 / 泉真沙子

愛のメタモルフォーゼ

古今東西を問わず、人々は愛を描き、愛を呟き、あるいはときに愛を演じ、そして愛について論じてきた。しかし、多くの人々に示されてなお、愛のカタチは変容を繰り返し、その姿をすっかり捉えてしまうことはできない。

The metamorphosis of LOVE

おまえは母さんにするときより、よっぽど愛情こめて、人形にキスするんだね？

『大典礼』アラバール

ペットは家族かいなか——これは現代でも、意見が分かれるテーマである。

ある調査によると、現在日本で飼われている犬猫の数は推定2,200万匹。15歳以下の人間の子ども数約1,800万をこえる。ペット居住可のマンション、ペット健康保険はいまや普通のことだし、家族同様に暮らしたペットを喪う悲しみは筆舌に尽くしがたい。

他方、ペットが家族かと問われれば、逡巡する人もいる。ペットはそもそも人間ではないし、「家族」というからには、血縁上のつながりや共同生活など、家族と呼ぶに値する根拠があるはずではないか。だから「ペットは家族ではない」という人も少なくない。

かつて社会学でも人類学でも、「家族」と呼ばれる集団に普遍的にあてはまる要素があるか論争があった。ところが世界的にみれば家族の姿は多様であり、共通の要素をみいだすことは難し

い。それゆえ現代の社会学では、人びとが主観的に思い描いた家族の範囲や定義を尊重すべきという議論が主流となっている。

実は日本でも、ほんの100年ほど前まで、血のつながらない継母・継子や嫁姑の関係は「家族」かそれとも「赤の他人」かで、人びとは悩んでいた。他

方、現代では、家族を定義する基準として、男女、親子、夫婦などの役割や規範より、当事者同士のコミュニケーションや愛が重視される。愛があれば、血のつながりのないステップ・ファミリー、同性愛カップルはもちろん、ペットも二次元キャラも家族だというメンタリティが広がっている。

このような趨勢を、社会学者のアンソニー・ギデンズは「純粋な関係性」と呼んでいる（『親密性の変容』1993年）。そこでは伝統的な父親、母親、子どもという役割自体も、自発的な選択の対象となるといふ。つまり恋愛や家族という親密性の領

域さえも、選択と合意という原理によって「民主化」されるというのだ。しかし選択と合意のみに基づく共同生活には、新たな困難もある。たとえば誰が夕食のお買

い物をするか、何をかうか、どう調理するかに至るまで、すべてを当事者同士がその場その場で交渉し、合意せねばならない。その調整コストは馬鹿に

ならない。選択の自由を増した現代の家族は、それゆえにかえって心理的ストレスを高めかねない。

ペットは人間と同様、愛とコミュニケーションの対象である。他方、人間ほどには調整コストがかからない、純粋に愛される存在でもある。ペットを飼った経験がある人にはなじみ深いことだが、彼ら／彼女らはしばしばペットを人間以上に愛してしまう。それがペットを喪う悲しみをいっそう倍加させる。言い方を換えればペットは、人間以上に「純粋な関係性」を体現する存在となっているのだろう。

ペット愛

ペットからみる
家族愛の変容
赤川学

つまり、それは、太古本来の姿を一つに集めるものでもあれば、また二つの半身から、一つの完全体をつくり、人間本来の姿を癒さんと努めるものなのです。

『饗宴』プラトン

野崎久義

愛するだけならば「メスとオス」はいらない

生物学的に見てメスとオスだけ

が愛し合うものなのだろうか。そんなことはない。メスとオスが進化していない原始的な単細胞生物にも「愛の原型」のようなものが認められる。クラミドモナスという単細胞性の緑藻は2本の鞭毛をもち、平泳ぎのようにして水中を泳ぎ回る。遺伝的に「性(sex)」が異なるもの同士が会おうと手をつなぐかのように互いに鞭毛を接触し合い、それがきっかけとなって細胞壁を脱いで裸となり細胞は融合(受精)する。この場合、両者に卵と精子のような違いが認められないので、我々は便宜的に片方の性を交配型プラスと呼び、もう一方を交配型マイナスと呼ぶ。このような原始的な段階の有性生殖を同型配偶という。同型配偶の進化段階で、異なる遺伝子型の子孫を残すという目的は果たされ、問題はないように思えるが、なぜ我々は「メスとオ

ス」の性をもつのであろうか。愛し合い細胞が合体するだけでは、多細胞生物は次世代を残せないことが大きな原因と考えられる。多細胞生物は大きな複雑なからだをもつので、親からの「栄養補給」がないと一人前にはなれない。そのための栄養補給をするのがメスの卵である。一方、オスは卵に受精するだけの役割を担った、小さな夥しい数の精子をつくる。ダチョウは最も大きな卵をもつと言われている。しかし、ゾウやクジラは大きな卵をもたない。これは、我々ほ乳類が「胎生」により次世代に栄養補給をするからで、卵は顕微鏡で見ないとわからないほど小さい。我々ヒトは約10ヶ月のあいだ、子

宮の胎盤を通して次世代に栄養を送り込む。更に、生まれた子供は未熟で最低数年は親が面倒を見ないといけない。最近は更にヒトは進化したようで、20年以上も次世代に「栄養補給」をしなれないような状況になっているようである。結婚して子供ができてからの親の任務が益々増大しつつある。愛するだけでよい単細胞生物が羨ましい。

原型愛

「私が生きているうちは」と彼女はよく言った。

「この変人揃いの屋敷にもお金だけは不足しないよ」。

『百年の孤独』ガルシア・マルケス

アブラムシ類は植物の上でびっしりと群れてコロニーを形成し、針状の口吻で植物の汁を吸う。セミの仲間(同翅目)たる所以である。彼らはコロニーを創設した1匹の母親(幹母)から単為生殖で産まれた雌虫に由来し、すべてクローン(混じり気なしの血縁)だ。

アブラムシには植物に虫こぶを作って、その内側の空洞で増殖するものがある。コロニー内の虫は繁殖虫と不妊の兵隊の2タイプに分かれて階級分化を示すの

で、社会性アブラムシと呼ばれる。兵隊はプロレスラーのごとくがっしりした体型で、口吻は太く短い槍の形状だ。天敵の昆虫が近づくと、何匹もの兵隊が相手に強くしがみついて次々に体内に槍のような口吻を突き刺すので、天敵は痛がって退散する。

嶋田研の博士3年・植松圭吾さんと柴尾晴信助教は、ヨシノミヤアブラムシの変わった性質を発見した。ヨシノミヤアブラムシには繁殖虫と兵隊の階級分

化は見られず、すべてが繁殖虫になる。その代わり、繁殖を終えた老齢の虫は体内に油脂成分を貯め、お尻から玉のように出す。これが瞬間接着剤として働き、自らの体を天敵の肢や頭にくっつけて相手を動けなくさせる。繁殖を過ぎた老齢の虫が身を挺して大事なコロニーを守るので、私達は「おばあちゃん効果」と

嶋田正和

おばあちゃんが身を挺して家族を守る社会性アブラムシ

呼んだ。

繁殖年齢を過ぎたヒトのおばあちゃんは、孫を世話することで家族に貢献する。霊長類やイルカにもこの現象は見られる。しかし、他の脊椎動物や昆虫では「おばあちゃん効果」は世界初の発見である。

ダーウィンが提唱した自然選択は、さかんに繁殖する若い個体に強くかかり、若い時期に有利な性質が進化する。一方、繁殖を終えた個体には有利な性質は進化できないので、早々に死ぬしかない。——これが老化の進化理論である。しかし、ヨシノミヤアブラムシは老齢の虫がコロニーを守ることで、間接的にコロニーの繁殖に大きく貢献する。血縁者を介しての自然選択が、この「有効な武器」をみごとに進化させたのだ。

おばあちゃん愛

言葉はいつまでも、ひとつの母国である。

「言葉を友人に持とう」 寺山修司

毎年10月9日は「ハングルの日」である。もちろん、日本の記念日ではなく韓国のである(ちなみに共和国=北朝鮮では1月15日)。ハングルというのは周知のとおり、朝鮮語(韓国語)を書き表すあの文字のことだ。日本に「ひらがな／カタカナの日」がないのでピンとこないかもしれないが、15世紀に創製された民族固有の文字の伝統を顕彰し、ひいてはそれによって表される言語に対する愛着心と誇りを喚起する国家的記念日である。

「国語愛／国字愛」は、近代の言文一致という言語・文字改革の文脈でその愛(=言語・文字ナショナリズム)は発現したが、それは「国語・国民・国家」が一体であるという(想像の)国民国家建設の要請に従ったものだった。近代朝鮮の場合も同様に、そのような時代的要請

に沿わんと、朝鮮の近代知識人たちは言語・文字改革に力を注いで、愛を実体化しようとした。

ところが、20世紀初めになって状況は一変した。1910年の韓国併合によって、日本語が「国語」として君臨し、朝鮮語は

限に利用しながら、何とか民族のことは／文字を守ろうと、言語・文字改革と伝統の顕彰を並行しておこなった。そのような愛の実体化が、決して彼／彼女らの望む形でなかったことは言うまでもない。「ハングルの日」の創設もそうであった。そして、戦時期にいたってはそのような愛を持つことさえ許されなくなった。

植民地からの解放後、「国語愛／国字愛」は復活した。それはあらたな国家建設という意味合いを持つと同時に直近の過去の虐げられた記憶をとまなうことになり、その意味では植民地以前の状況とは性質が異なった。ほどなくして南北が分断され、差異化が進む南北の言語環境を目の当たりにし(それは、「ハングルの日」が同じ日に祝えていないことからわかるだろう)、再び「民族語／民族文字愛」が前景化してくる。

しかし、ナショナリズムの持つ包摂と排除の論理が非難の対象となって久しい。国外からの人の流入の日常化と、南北関係の緊張を背景に、韓国ではナショナリズムの基盤が揺れている。今後、「国語愛／国字愛」はどうなっていくのだろうか。注目していきたい。

「国語」の位置から転落した。朝鮮人の言語愛／文字愛は「民族」に向かうことになるが、もともと独立の危険性ははらむこのような動きを、日本は危険視し、アメとムチを使い分けて管理しようとした。朝鮮の知識人はそのような管理の場を最大

国字愛

紆余曲折の「国語(字)愛」

三ツ井崇

私は死ねば、一羽の白鳩か一茎のアネモネの花になりたいのであります。

そう思う方が生きている時の心の愛がどんなに広々とのびやかなことでありましょう。

「抒情歌」 川端康成

文化的な多様性に富み、歴史的に多くの亀裂や葛藤を抱えてきたドイツ語圏文学において、<境界>は大きな問題であり続けてきた。愛という主題も、この問題と結びつくことでさまざまな展開を見せる。

まずは、人間と人間ならざる者の境界を乗り越えさせる力としての愛。すぐに連想されるのは、グリム童話やロマン派のメルヘンにおける変身譚だろう。グリム童話では、愛の成就のあまりのあっけなさが、かえって何気なく踏み越えられた境界の存在をなまなましく感知させることがある。ロマン派のある短編では、愛の幻想が破れ、絶対に踏み越えられない境界に突き当たった人間が陥る狂気をとおして、この身体に閉じ込められた<わたし>の孤絶が描き出される(変身譚とは言えないが、ホフマンの『砂男』における自動人形オリンピアへの愛のような)。

日常の世界が少しずつ歪んでいく過程を緻密に辿りながら、その歪みの果てに、ある<別の状態>としての愛を表現

しようとするムージル—— 姦通小説の枠組みのなかで異様な世界が繰り広げられる中編『愛の完成』をここでは挙げておこう—— も、ハプスブ

越境愛

複数の声に耳を澄まし、あるいはそれに駆り立てられつつ言葉を編み出していくこと、それはささやかな、しかし危うい変身を繰り返していくことなのかもしれない。ドイツ語圏の文学を読み、そのような変身の痕跡をいくつも辿っていると、アクロバットのようなその営みが、じつは一つの呼びかけ—— 失われた、あるいはいまだ出会うことのできていない誰かへ向けての—— なのだと気づくことがある。さまざまな声調で、とぎれとぎれに、あるいは執拗なまでの一貫性を持って発される呼びかけのなかに、ときには呪詛と切り離せないような愛の諸相が浮かび上がってくる。

宮田眞治

境界・変身・愛

複数の

声に耳を澄まし、

あるいはそれに駆り

立てられつつ言葉を編

み出していくこと、それ

はささやかな、しかし

危うい変身を繰り返

していくことなのかも

もしれない。ドイツ語

圏の文学を読み、そのよ

うな変身の痕跡をいく

つも辿っていると、ア

クロバットのようなその

営みが、じつは一つの

呼びかけ—— 失われた、

あるいはいまだ出会う

ことのできていない誰か

へ向けての—— なのだと

気づくことがある。さ

まざまな声調で、とぎれ

とぎれに、あるいは執

拗なまでの一貫性を持

って発される呼びかけ

のなかに、ときには呪

詛と切り離せないよう

な愛の諸相が浮かび上

がってくる。

THE ROAD NOT TAKEN

or: Things Not Chosen

選択のすきま 掌からこぼれおちていく何か

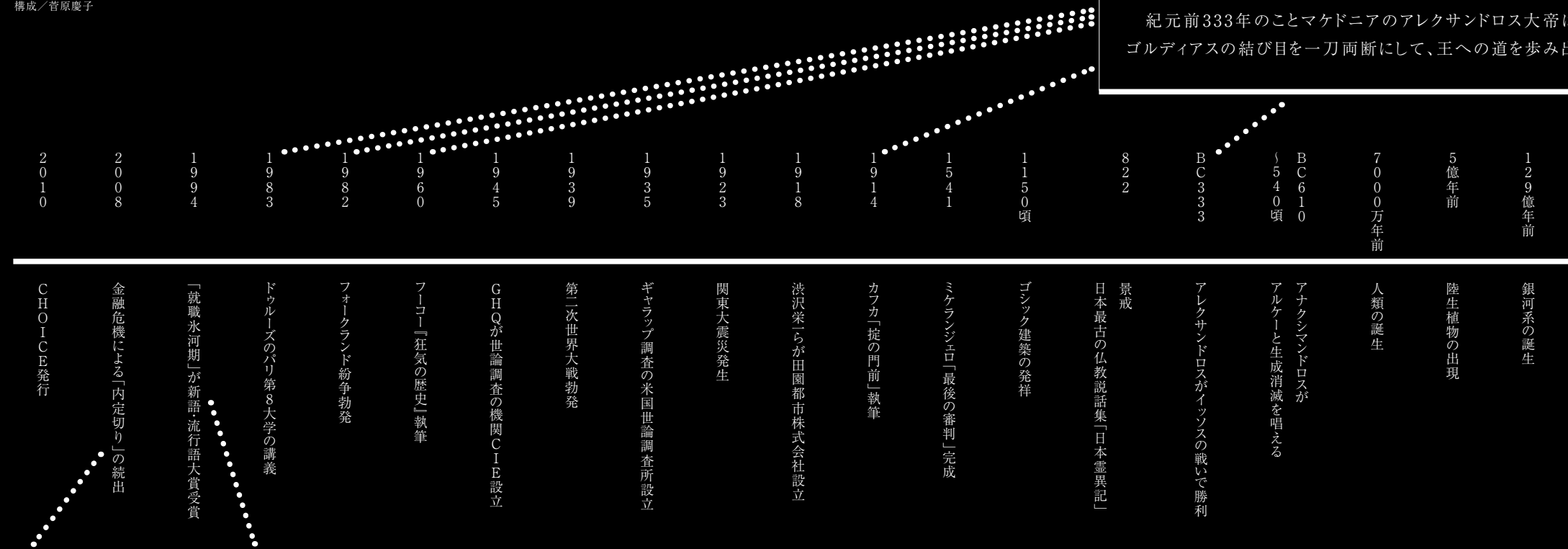
右か左か、日常は選択の連続。

はたまた斜めか、選択肢は増えるばかり。それでも、選択肢がある限りその網で掬えないものがある。

そんな「選択のすきま」にこそ選択の本質があるかもしれない。

世界の真理を様々に切り拓く学問の知の先導のもとに、すきまを覗いてみようではないか。

構成／菅原慶子



すきまの形而上学

石田英敬

アルゼンチンの盲目の作家、ルイス・ホルヘ・ボルヘスは1982年祖国アルゼンチンと英国の間に勃発したフォークランド諸島(スペイン語ではマルビナス諸島)領有をめぐる紛争に際して、「二人の禿男が櫛を奪い合うようなものだ」と喝破した。

二十世紀の知の巨人ミシェル・フーコーは、1960年の学位論文『狂気の歴史』執筆の頃にはまだうすすと髪が生えていた。ある日頭を刺ることを決定することで以後自分は頭髪の問題から自由になったのだと語っている。

紀元前333年のことマケドニアのアレクサンドロス大帝はゴルディアスの結び目を一刀両断にして、王への道を歩み出

した。

フランスの哲学者ジル・ドゥルーズは、1983年のパリ第8大学講義で毛の生えている状態からかぎりなく毛の薄い状態への推移と対比させて、ひとが「禿だ!」という性格付与が起る瞬間を語っている。

1914年のフランツ・カフカの短編「掟の門前」で、法の中に入るか入るまいか迷いつづけた哀れな田舎の男は、一生待ち続けたあげく死の間際に門番から「ほかの誰ひとり、ここには入れない。この門は、おまえひとりのためのものだった。さあ、もうおれは行く。ここを閉めるぞ。」と門を閉じられてしまう。

ユーモアの洞察、自由への意志、蛮勇の暴力、決定の瞬間、法の超越、これらはすべて選択のすきまにひらかれている無限の目くるめく深淵なのである。

それは選択ではない

本田由紀

「それはお前の選択の結果だ」という類のことを言われることがままある。それがハッピーな事柄について——「ほんとうにいい嫁さんと結婚したなあ」というように——であれば、特に問題はない。しかし、この種の言葉が苦しい状況にある人々に投げつけられるとき、それは酷い刃となる。たとえば、仕事も住居もなく彷徨わざるをえない人に対して、「若い頃からちゃんと勉強して就職しておけばよかったのに、そうしなかった当人が悪い」という言い方がされる。あるいは、長い就職活動

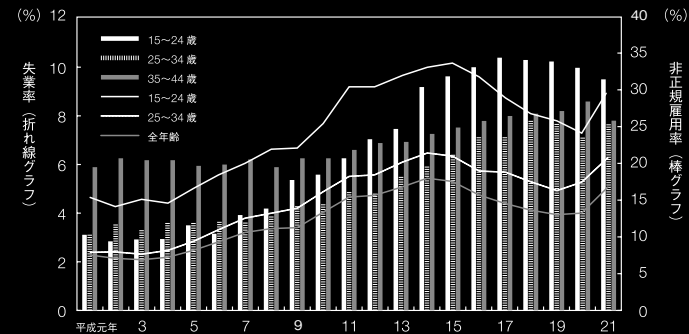
の末にやっと決まった就職先から「内定切り」にあった人に対して、「そんなあぶなそうな会社を選んだ奴が悪い」というコメントがつけられる。そのような場合の「選択」に関する言説は、①倫理的にただしくなく、②実践的には益がなく、③論理的にも間違っている。

①倫理的にただしくないというのは、強いダメージを受けて途方に暮れている他者をさらに断罪することの悪を意味している。②実践的に益がないというのは、原因を当人の選択に帰したところでそうした人々の状況は改善されず、また苦しい状況にある人々を生み出している大きな現実を是正することに対してなら役立たないということを意味する。③論理的に間違っているというのは、苦しい状

況にある人々は真の意味で「選択」してそうなったわけではないということである。「選択」が「選択」として成立しうるのは、多様性と魅力に富んだ選択肢が存在し、そのいずれかを選ぶことによる帰結についての情報も十分に存在し、かつそのいずれをも選べる自由が実質的に存在している場合のみである。しかし、先述の例にはそうした条件が該当しない。それゆえ彼らの状況を「選択」によって説明することはできない。

「自由な選択」を称揚するのならば、それを成立させる条件をまず整える必要がある。そうでない限り、「選択の隙間」にとめどなく落ちてゆく人々が生み出され続けるだけだ。

若年者の失業率、非正規雇用率の推移



資料:失業率は、総務省統計局「労働力調査」。非正規雇用率は、総務省統計局「労働力特別調査」(2月調査)及び「労働力調査(詳細結果)」(1~3月期調査)。
出典:中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(第二次審議過程報告)」データ集、2010. 5. 17

「すきま」と「厚み」

佐藤健二

Aに近いか、Bに近いか。選択肢を設定し、それぞれの考えや態度を答えてもらう。質問紙調査では、よくある形式だ。調査の場面ばかりではない。論文の骨格となる概念でも、対立する二項目がよく使われる。たとえば「近代的」か「封建的」か、あるいは「民主主義」と「全体主義」等々。二項対立の概念はきっぱりと潔く、なかなか便利などころもある。対立するAとBとを結ぶ線分は、論者が論点を整理し明確化する補助線となり、あるいは人びとの選択を測るものさしと

して使える。

学生だった昔、このAとBとは、平等で対等で均等で同等の選択肢として、独立しているのだと思っていた。しかし、しだいにそうも言い切れないことに気づく。たとえばかつて流行した「近代化」論など、表からあふれるほど多くの二項対立概念によって、「近代社会」と「伝統社会」を描き分けた。しかし、そのほとんどは論者が望ましいとおもう理想を「近代的」と名づけ、そうは言えない特質を後から探しだしてきて「伝統的」と称した節がある。「A」を望ましいと思う立場からの「B」は、じつは「非A」の融通無碍の受け皿として使われていることも珍しくない。すでに好ましいものを密かに選んでしまった上で、

形だけ対立するよう作られた選択肢は不誠実で、なにより道具として不自由だ。Aと非Aとでは、平面的ですきまがなく動きようがない。

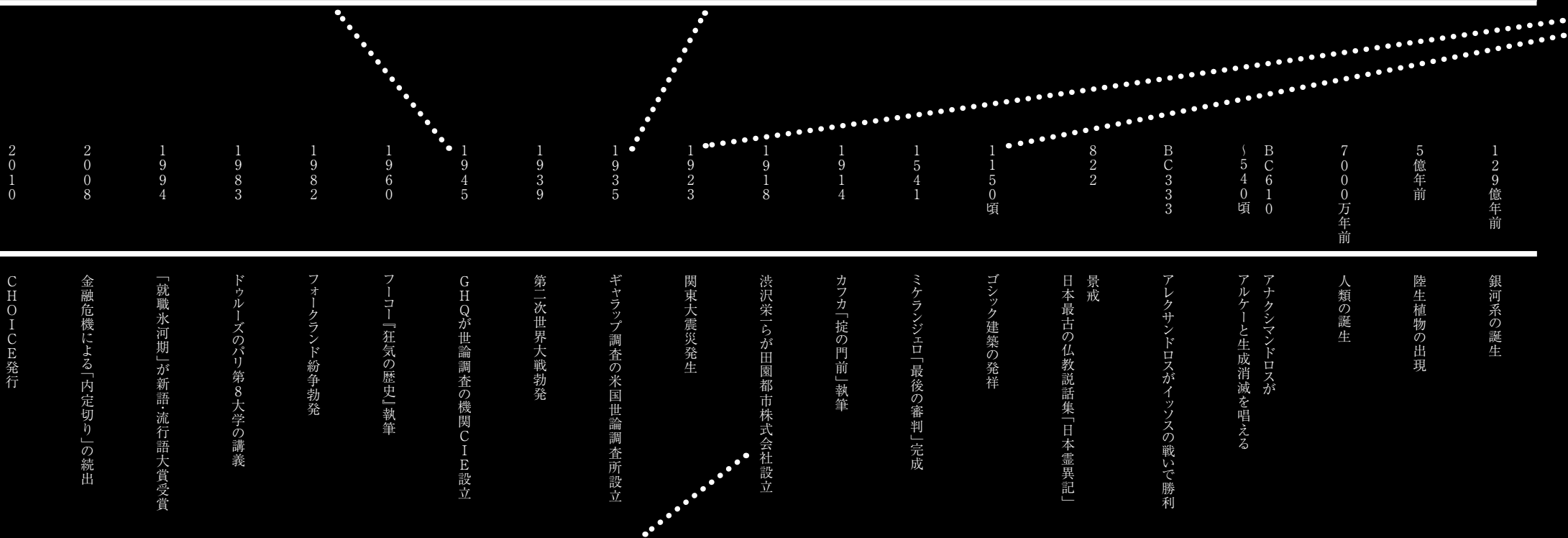
そういう時、あえてCという第三の項目を配置してみると、二項に閉じた概念の空間が動き出す。この智慧は存外に役に立つ。中味を考えていない例で申し訳ないが、「草食系」と「肉食系」とでオノコどもを分類しようという思い込みに、「絶食系」とか「外食系」とかいう第三の意外なことばを割り込ませると、安定して当てはまるかのように見えていた分類が揺らぎ、見方の枠組みが変わってこないか。分類の「すきま」と「厚み」ともいうべき立体性を感じることができれば、選択もまた、もうすこし豊かなものになりうる。

創造と選択

大野秀敏

創造は無から有を生み出す行為のように考えられる。しかし、聖書に記される天地の創造6日目に、神は自身に似せて人を創造したとしている。最初の創造は真似であった。当然のことながら、神の被創造物である人間には、まったく見たことも聞いたこともない形を生み出すことなどできない。創造が真似であるならば、何を真似るかという選択の問題になる。実際、19世紀の欧州では、建築設計を様式の選択の問題として考えた時期があった。過去の歴史から様々な様式を拝借した。そのとき、過去の様式にはそれぞれ特別な意味が与えられていた。例えば、ゴシック様式は教会建築として発展したが、中世では、学者と言えば僧侶であったから学問と結びつく。東大の本郷キャンパスに建つ古い建物は、関東大震災後の建物でありながら、ゴシック系列のデザインであるのはこのためである。次の時代は、このような選択に堕した前世紀を批判し創造の優位を強調するが、近代建築の開拓者たちも、実は機械や工場を参照してデザインしていた。ただ、それらは彼らによって発見された対象である。

デザインは選択の連続でありながら、全ての選択肢が予め用意されているわけではない。むしろ、時代は常に刻一刻と変化し世界は多様だから、それに応える為には、建築家は自ら選択肢を発見し創造しなければならない。それは世界を再解釈することであり、創造と選択の深いすきまを架橋する瞬間である。



都市選びの法則

大西隆

人生でもっとも大事な選択はパートナーを決めることであろうが、どの都市に住むかということも結構重要な選択である。一極集中という言葉があるように、日本では様々な吸引力によって東京に引き寄せられる傾向がある。しかし、それでも一都三県にわたり多くのまちが含まれている東京圏の中でどこに住むかという選択肢はある。とはいえ、経験的には、人はどこにでも自由に住み得るわけではなく、東京の居住地については、いずれも未証明だが少

なくとも2つの「法則」が支配してきたという。1番目は黎明期のデベロッパーが、会社員は朝日を目指して出勤し、夕陽に向かって帰宅するのが健全だと考えたために、東京では西、南方面から開発が進み、高級住宅地が形成され、次第に北や東へと開発が及んでいったという反時計回りの「居住地格形成の法則」である。2番目は、転居する時には、ターミナル駅から伸びる郊外鉄道が作る楔形のエリアの中で動き、これを大きく逸脱しない傾向があるという「沿線固定化の法則」である。土地勘ができ、知り合いが増えると、戸建て住宅に住んだり、マンションに移ったりで沿線を都心に近付いたり、離れたりはするものの、なかなか線

を変えないというのだ。この2法則が当てはまると、東京人は住みついた時期や所得によって沿線が決まり、後はその沿線内で動くという比較的限定された居住地選択をしていることになる。かくいう私も、自分で居住地を選ぶようになってから4カ所で暮らしたが、この法則が大体当てはまってしまう。住宅探しの際には大きく沿線を変えようとしたこともあるが、結局決めかねて、馴染みのある沿線に落ち着いたという経験もある。筆者の研究領域は都市計画なので、変わったところに住むことが研究にも役立つのではないかと思うのだが、選択の隙間に踏み込むのは、少なくともこれまでは簡単ではなかった。

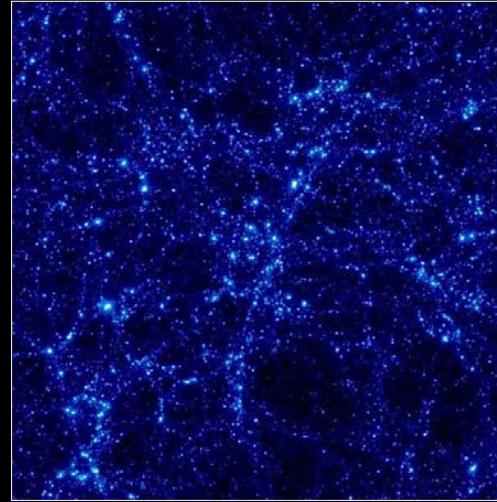
植物のすきま活用戦略

鷺谷いつみ

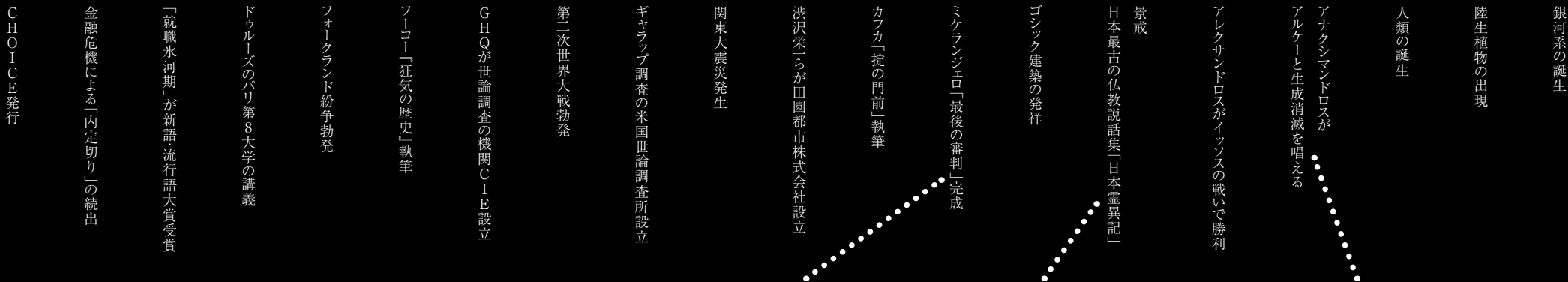
「すきま」とその選択は、植物たちの一生にも大きな意味をもっています。自らの意志で動けない植物は、暗がりでは発芽してもやしになって死んでしまいます。そのため植物の種子は「明るいすきま」選択のための生理的仕組みを備えています。そのセンサーの一つは変温への反応性です。真っ暗な植生の下では地表面でも一日の温度変化が少ない一方、すきまでは昼夜で大きな温度差が生じます。すきまシグナルともいべき温度変化や高温にに応じて発芽すれば、成長に適したすきまを選択できます。もしシグナルが届かなければ、やがてすきまができるまで眠っていればよいのです。種子は休眠状態で百年以上生きられるものもあります。待てば海路の日和あり、です。

川の氾濫原は大規模なすきまができやすく、「すきま好みの植物」の格好の生活場所です。さらに、森と水辺の間の空間が好きなヒトがこの地球に現れてからは、ヒトの植物資源の採集行為が確実にすきまをつくりだすようになりました。人類が鉄器で木を切倒し始めると森にもすきまができるようになりました。ヒトの歴史を通じて時折大小様々なすきまができる環境が持続し、多くの生きものがヒトとともにその環境を利用しました。

ヒトが農地を切り開くと一年中「明るいすきま」が出現します。それが大規模化しマトリックスになれば生物相は単純化します。作物を食べる害虫たちの天下です。モノカルチャーの単純な生態系に対して、湿地である昔ながらの水田や里山が生物多様性の視点から評価されるようになりました。今後は、大小の植生のすきまをつくりながらの暮らしの生態学的原理に目を向け、ヒトと自然との共生のあり方をデザインすることが必要そうです。



数値シミュレーションによる宇宙の大規模構造 (IPMU 吉田直紀特任准教授提供)。差し渡し10億光年の箱の中には、銀河が多く集まっている場所があるとともに、泡状の形態をしている「すきま」が存在している。



生きる姿勢としての希望

清水哲郎

私たちは独り生きているのではなく、仲間と共に生きている。私たちのいのちには、個々の身体が各々生きているという〈生物学的生命〉の次元に加えて、人生の物語りを創り出し、語りつつ生きているという〈物語られるいのち〉の次元がある。そこでは、私たちのいのちは互いに浸透し合い、重なり合っている。そこで、親しい者の死は〈別れ〉であり、私のいのちの一部が欠けることとして、重大な喪失である。

この喪失を緩和すべく、多くの文化には、物語られるいのちは死後

も死者の世界（他界）で続くという言説がある。他界の場所は、里から見える山であったり、海の方こうであったりした。人々は死後を語り合い、再会を保証し合い、そのようにして希望としての他界を言葉において創り出した。

さらに、死者の世界は、時に楽園（天国・極楽）と地獄に分裂する。現在の生き方により、死後どちらに行くかが決まるという教えにより、現在をどう生きるかの選択が迫られる。「未来の幸福を欲するなら、現在のいのちを善く、あるいはむしろ正しく生きよ」と。だが、そのような言説に対しては、しばしばより高い見地からの「未来の幸福を目指して、今よく生きる」という選択自体が、我欲肯定であり、利己的

な幸福追求だとの批判がされもした。

では、死後の幸福でないのなら、私たちは死に直面することになった時に、何を希望することができるのか？ あるいは、希望は結局絶望に終わらざるをえないのだろうか？ 否、「希望」は未来の何かではなく、現在の私のあり方を示す語であり、今を前向きに生きるという姿勢こそが、「希望がある」ということの実質である。そのような姿勢は、人々の物語られるいのちのネットワークの中でこそ最期まで支えられる——孤独ないし孤立が人を絶望へと追い込む。天国か地獄かと迫る選択を無化するような視線の変換——死後から現在の生への——もまた、選択のすきまへと向かっている。

宇宙のすきまと選択：暗黒の宇宙

杉山直

宇宙のイメージとは、無限ともいえる空間に浮かび輝く星や銀河の姿であろう。星や銀河の間のすきまは、果たして空隙なのか、それとも何者かに満たされているのだろうか。この問いに対する回答が観測によって与えられたのは、ごく最近のことである。それは、人類の宇宙観に大きな変革を迫るものであった。すきまを覗くことによって、新たな宇宙観が生まれたのだ。

銀河は、宇宙空間に漂っていたガスが、重力の働きによって集められたことによって形成される。そこでは、ガス自身が集団化という選択を行ったように見える。しかし、じつはその選択は、別のものによってもたらされたのだ。ガスを重力的には大きく凌駕し、一方で光を発することのない、謎の物質がガスを取り囲み、またそのすきまを埋める形で存在しているのである。暗黒物質と呼ぶ。暗黒物質が己の重力によって集まることで、銀河や銀河の集団は形成されてきたのだ。暗黒物質が存在せず、ガスが選択を行う宇宙では、銀河以下の構造ができないこともまたわかっている。

暗黒物質は、自己の重力により集団化しているために、宇宙にはすきまが残される。しかし、このすきまはまた、謎のエネルギーによって埋め尽くされていることが明らかになってきた。謎のエネルギーは、空間を拡げる働きをし、その結果、宇宙の膨張は時々刻々とその速度を増している。膨張の加速は、空間を莫大に拡げるために、謎のエネルギーを別として、空間を空っぽにする。この謎のエネルギーのことを暗黒エネルギーと呼ぶ。すきまを満たす暗黒のエネルギーが、すきまを拡げるのである。

暗黒エネルギーと暗黒物質に支配され、やがて空っぽになっていく宇宙、それが最新の宇宙観である。暗黒エネルギーと暗黒物質の正体に迫るには、学問のすきまを埋めていく必要があるようである。暗黒エネルギーは、宇宙全体の真空の持つエネルギーであり、物性物理学が教える相転移や、素粒子の統一理論である超紐理論と関わりがあるかもしれない。暗黒物質の正体は未だ不明であるが、未知の素粒子である可能性が最も高いと考えられている。宇宙論、素粒子論、物性物理学などの学問領域の境界に残されたすきまに、回答が隠されているのかもしれない。

BEING NATURAL

— THAT IS, NOT CHOOSING



My academic life as a dog.

巻末インタビュー

本能のままに — 選択しない、ということ

末廣昭 (東京大学社会科学研究所 所長)

ここまで、学問というフィルターを通して「選択(choice)」をさまざまな角度から見てきました。

最後に、40年に及ぶ地域研究の経験から「選択」という考え方そのものに疑問を呈する末廣教授とともに、個人の、そして社会の選択について考えてみます。

「選択肢の中から、自由意志に基づき、合理的な計算によって選択をする」という

西欧的な考え方に、私たちはとらわれすぎているのかもしれない。

末廣昭: 1951年鳥取県生まれ。東京大学大学院経済学研究科修了。経済学博士。アジア経済研究所、大阪市立大学をへて、92年東京大学社会科学研究所助教授、95年同教授。2009年から同所長。専攻はアジア経済社会論。タイを中心に東アジアの産業と企業、労使関係などを研究。アジア政経学会元理事長。現在、日本タイ学会会長。『タイ—中進国の模索』(2009年)、『東アジア福祉システムの展望』(編著、2010年)など著書多数。2010年、東南アジア地域研究の功績で紫綬褒章を受賞。

研究対象は「選択」していない

— 今回は末廣先生に「選択(choice)」というテーマで話を伺おうと思っているのですが。

末廣 そもそも私は「選択」というテーマにイマイチピンときません(笑)。私の専門は地域研究で、アジアの経済社会やタイについて研究していますが、そもそもアジアやタイを研究対象として「選択した」という意識がないからです。

— それはどういうことですか?

末廣 私が大学に入学したのは1970年です。故郷の鳥取県から東京に出てくる時から、アジアとりわけ東南アジアを研究したいと思っていました。当時、アジアは非常に動いていました。65年以降、ベトナムでは北爆が始まり、民族解放運動が盛んに行われ、また日韓条約も結ばれるなど、アジアに関する報道がとて多かったです。66年には中国で文化大革命があり、当時はネガティブではなく新しい運動として日本でも紹介されていました。

アジアに興味があり、アジアの人と付き合いたかったので、大学では、留学生の日常的な世話をする活動をしていました。家主さんとの下宿のトラブルを仲介したり、日本語を教えたり、卒業論文の手伝いをしたりなどです。資本自由化で日本企業のアジア進出が急速に増えたのが70年以降です。72年11月にタ

イで反日運動が起きて、その時に留学生たちに協力したというのがタイとの関りの始まりですね。

— 反日運動のお手伝いをされていたんですか(笑)。

末廣 反日運動を彼らと一緒にやったということではなく、反日運動について日本のメディアがどう報じているのか、とにかく目につく資料を集めて整理し、タイ人留学生に渡していました。

— 当時のタイの反日運動はどのような背景で起こっていたんですか。

末廣 先ほど申し上げましたように、72年11月に、タイ全国学生センター(NSCT)が中心になって日本製品ボイコットのキャンペーンが始まりました。また、当時は圧倒的な日本の輸出超過で、タイから日本への輸出が伸びない。対日貿易赤字が東南アジアで大きな問題になっていました。急速に進出してきた日本企業は資本や技術を持ち込んだけれども、それが進出先の文化を無視した経済侵略だと捉えられ、日本企業の看板が町中に溢れている状況が「日本資本のオーバープレゼンスだ」と批判されたわけです。今は日本企業が看板を出してもそういう反応はないし、韓国のサムソンとかLGがあちこちで看板を立てても、それに対する反発はありません。70年代というのは、ベトナムをはじめ東南アジア全域で、民族主義や経済ナショナリズムの動きが活発だった時代です。当時、日本に対して「エコノミック・アニマル」という言い方がされていま

したが、具体的に行動を起こしたのはタイが初めてで、その後、インドネシアなどに広がって行きました。

— 日本にいる留学生たちは、タイでの反日運動をどう受け止めていたんでしょうか。

末廣 彼らは、反日という感情から行動を起こすというよりは、反日運動がなぜ母国で起きているのかということに関心を持っていました。当時のタイは軍事政権です。ですので、学生たちの反日運動は実は半分の姿で、もう半分は当時の軍事政権に対する批判だったので。とくに73年10月には、有名な「学生革命」(10月14日政変)が起きて、200名を超える犠牲者を出しながら、15年間続いた軍事政権を倒壊に追いやりま。この事件は世界中のタイ人留学生に大変なショックを与えました。日本にいる留学生たちは、まず本国の仲間と連絡をとりながら勉強会を開き、同時に、今タイで起きていることを日本人に訴える展示会を開催する。私はそれを横からサポートする。そういうことをやっていた。彼らの大半は日本に来るまでは政治に無関心な学生だったのですが、73年の「学生革命」を転機にして、母国の政治に目を向けるようになり、日本で活動を開始したわけです。同年代の大学生として、私も彼らの活動に共感し、自然とタイという国に関心が向かって行きました。

この気持ちは、日本における学生運動とも関係していました。私が大学に入学した70年は日米安保改正の年です。東京大学が入試を中止した69年の翌

国際化に見合った「ものの考え方の幅」を広げるのが地域研究の大きな役割です。

年ですから、私たちの時代は、学生運動もかなり盛んで、駒場での語学の授業は、自治会や各種組織が主催する集会や討論会でよくつぶれていました。政治に対する熱気がまだ大学の中に残っていた時代です。

そんな中で、大学入学前の東南アジアへの関心は、73年頃にはタイに収斂して行きました。タイを研究対象として選んだというよりも、タイという国が私に寄ってきたという感じです。基本的には好奇心でしょうか。おもしろいからやっていく。「選択する」という今回のテーマでは、A、B、C、Dと、選択肢があるというのが前提だと思います。でも、今振り返ってみると、私が怠け者だったのか（笑）、そういう選択肢を考えなかった。他を落として敢えてタイを選んだというのではなくて、自然にタイのほう近づいてきたという感じです。

タイの歴史における「仏の見えざる手」

末廣 「選択」というテーマ設定は、タイにとっても、しっかりと来ません。というのも、タイの歴史をひもとくと、タイが主体的に「選択した」からそうなったというよりは、本人の意図せざるどころの要素で、あるいは私の言う「仏の見えざる手」によりそうなったとしか言えない例がいくつもあるからです。

タイ人というのは、例えばある政策を選んだときに、筋を通す、というのではなくて、相手にうまく合わせることを重視します。基本的にタイの人は相手と正面から

競争するとか、相手を名指して批判するというのを嫌うし、他人が見ている前で誰かに罵倒された場合、その相手を名誉棄損で裁判所に訴える正当な理由になります。

一つの例を挙げますと、相手がよくできる人だと「とてもよくできる」と褒め称え、できない人でも「それなりに…」という言い方をして、相手を傷つけないようにする。切磋琢磨してこそ成り立つ日本型生産システムが、タイの企業では定着しないひとつの理由がここにあります。例えば韓国では、政治家に汚職疑惑があった場合には徹底的に追及して、その結果、自殺に追い込まれる人が出てきたりします。木にたとえると、材質は硬いけど、力を加え続けると最後にポキッと折れてしまう。韓国はそういう社会だと思います。一方、タイの場合は柳の枝というか、曲げても折れない社会で、汚職をしても人々が容認し、クーデターに失敗しても、リーダーには恩赦があって許されるという融通無碍さがあります。

タイ人は、絶えず時代の流れと周りの反応を見て行動します。第二次世界大戦の際、日本と軍事同盟を結びながら、戦争が終わった時には連合軍とちゃっかり同盟を結んで敗戦国にならなかった。だからタイは信用ならない国だ、二股膏薬の国だという批判もありますが、原理原則に固執せず、常に柔軟に対応するという姿勢が、これまで植民地にもならず、また、第二次大戦後もそれなりの経済成長や社会発展を続けてきた大きな理由だと思うんです。

それにもう一つ、なぜか偶然が重なるんですね（笑）。97年のアジア通貨危機のあと、タイは経済危機に陥ります。とこ

ろが、そのあと、エルニーニョ現象でフィリピンもインドネシアも農業が大きな被害を受けたのに、タイだけ免れました。そのため、世界の農産物価格が上昇し、タイの農村部は潤って都市部の失業者（出稼ぎ労働者）のクッションの役割を果たしました。あるいは、インドネシアで焼き畑による山火事が起きたときも、シンガポールとかマレーシアが大きな被害を受けたにもかかわらず、季節風の関係でタイまでは行かない。そうすると、誰かが守っているんじゃないかと、つい思ってしまうわけです（笑）。

「仏の見えざる手」というのは、私がアダム・スミスの「市場という見えざる手」をもじって、勝手に言っているだけなのですが、そういう目に見えない要素が働いている。この目に見えない要素の背後に、コンフリクトを避けたり、それが激化するのを事前に抑制するような智慧（タイ語でパンヤーという。語源は日本の「般若」と同じサンスクリット語のパンニャ）が働いているのは間違いない。ですから、タイの政治や経済を分析していても、原理原則で必ずしも説明できないことが出てくる。政治にしる、経済にしる、「結果よければすべてよし」のところがあります。

他者を理解するための地域研究

— 世の中の現象を分析して、因果関係を明らかにする、というのが一般的な学問に対するイメージだと思います。そのような因果関係の証明がしにくい地

域も研究対象とする地域研究とは一体どのような学問なのでしょう？

末廣 現代というのはほとんどと物事が動きます。自分が「タイの社会はこういう原理で動くのだ」と理解しても、時代や状況の変化に応じて、タイの社会自身がどんどん変わっていきます。その動きに研究者がついていけば、自分の視点や意見も変わっていくわけで、客観性を重視する社会科学の研究者としては失格でしょうね。でも私はそれでいいと思っています。30年前にバンコクで出会った日本人ビジネスマンたちは、「10年、20年たっても、いや永久に、この国では地下鉄はできない」とか「タイ人は残業をしない」と主張していました。でも結局、地下鉄は開通したし、タイ人は土曜日曜の残業もするようになった。その事実から出発すればよいと思います。

地域研究にとって大切なことは、特定の国・地域に対する研究の持続性と積み重ねの努力です。私のタイ研究の場合、1972年の反日運動から数えて40年近い時間が過ぎました。家族よりも付き合いが長いわけです。理工系のある分野では、その分野の先端の研究ができる年齢は30代くらいまでで、同じことを続けるというのは、「同じことしかできない」とネガティブに評価される場合もあると聞いたことがあります。一方、地域研究の場合、同じ国・地域の研究を続けることは、むしろポジティブな意味を持つと思います。幸い、日本の東南アジア研究は過去30年間に大きく進展し、後進の研究者たちはこれらの蓄積から出発することができます。でも、南アジア、中東、アフリカの研究を目指す人は、

現地語の習得も含めて、研究インフラの構築だけでも相当の時間がかかります。それを認めるだけの度量が社会や大学の側にないと、地域研究はとても成り立ちません。

— 今日本では、短い期間で目に見える成果を出すような研究が評価されやすい状況になっているように思います。長い時間がかかり、成果の見えにくい研究も非常に大事だと思います。そういった研究の有用性を社会に認めてもらうにはどうすべきとお考えですか。

末廣 私は地域研究の目的は、行き着くところ「他者理解」にあると思います。自分の理解の幅を広げて、他者を理解するツールを増やしていくことが、地域研究の大きな役割です。ただし、それは地域研究者本人の問題で、その成果をどのように他の人に伝えていくかという別の問題が生じます。理工系の場合は追試、つまり実験で事後的に証明できるかどうか、学問上決定的に重要ですが、地域研究の場合は、研究者の好奇心と経験によって研究の内容が大きく規定されるので、第三者が同じように追体験できないわけです。そこで、定性的な記述ではなく定量的なデータを示し、仮説を構築し、査読付き英文雑誌に論文を書かなければいけない、という話になります。最近、とみにこの傾向が強まってきました。

しかし、現地語で理解した事象なり概念を英語に翻訳した段階で、当然乖離が生じます。例えば、タイでは「国のガバナンス」のことを「タンマ・ラット」（仏法に従った国の運営）と訳しています。タ

ンマ（仏法）の語源はサンスクリット語ですが、日本では中国経由で「ダルマ」になりました。逆に、このタンマ（ダルマ）を英語のガバナンスに置き換えたら、タイで使われている意味と変わってしまいます。民主主義、自由、公正と公平といった基本概念も同様です。仮に地域研究の研究成果をもっぱら英語でのみ発表したら、それは地域研究にとっては自殺行為になりかねないと私は思います。

地域研究というのは「他者を理解するための手段」なので、日本社会との関係を見る目を持つことがとても大切です。タイと中国の比較ではなく、タイと日本を比較する。ですから、研究成果については英語に限らず、日本語や現地語で書くことも大事にしたい。それは日本人が自分たちの社会を見るとき視野の幅を広げることに貢献すると思うからです。

ひとつの例を挙げますと、日本という国はイスラーム教徒にとって非常に住みにくい社会ですね。最近では構内に礼拝室を作る大学もでてきましたが、イスラーム教徒にはまだまだ冷たい社会です。実際、私の大学院演習に参加していたインドネシア人留学生は、鶏肉は福岡市にある特別の店から宅急便で取り寄せていました。一方、タイのセブンイレブン（地元のCPグループが経営）の店舗の中には、人口の5%を占めるイスラーム教徒のために「ムスリム・コーナー」を設けて、食品を販売している所があります。大学や官庁の食堂に行っても、イスラーム教徒向けの屋台が結構あります。このような「他者に対する配慮」は、残念ながら日本にはまだありません。国際化とよく言われますが、それに見合った「ものの考え

「獲物を追う猟犬のようだ」と言われます。おもしろいものがあると突っ走っていくんですね。

方の幅」を広げるといのが、地域研究の大きな役割だろうと思います。

地域研究の視点から現代の日本を見る

—— そういった、アジアの地域研究の視点から逆に日本を見るといかがでしょうか。今の日本はアメリカ型の社会を指している気がします。個人的には「本当にそれでいいのか、アジアにはアジア独自のやり方もあるのではないか」と思うこともあるのですが。

末廣 高度成長が前提だった時代には、景気の変動はあっても、基本的には右肩上がり給料が上がり、国の力も上がっていくという状況でした。そういう時代には、日本は海外にモデルを求めるのではなく、むしろ、日本が海外の人々にとってのモデルになる(日本型経営、J型経済システムなど)と考えていました。ところが、バブルが崩壊すると、日本は自信を失い、アメリカをモデルとする「構造改革」に邁進し、最近では行き過ぎた「構造改革」への反省から日本社会の見直しが始まりました。そういう中で、格差の拡大や雇用の不安定性といった成熟社会の問題が一気に顕在化しているのが現状だろうと思います。

そこで、ひとつ質問があります。タイ人に対してタイ語で「あなたは今自分の仕事が○○ですか」と尋ねたとしますよね。○○に来る言葉は何だと思いますか。

—— 「楽しい」ですかね。

末廣 やはり、日本人だとそうでしょ。でもタイ人は違います。タイ語で仕事は「ンガーヌ」と言いますが、「ンガーヌ」というのはもともと「苦役」を指します。国王が賦役として強制した労働なので楽しいはずはない。だから、日本人の上司がタイ人の部下に「仕事生きがい論」を展開しても通じない。タイ語では○○のところには「サバーイ」という言葉が入ります。「サバーイ」というのは心安らかとか、心が穏やかという意味です。仕事で一番大切なことは人間関係で、上司とも同僚とも家族のように気楽にやれる職場がいい。でも、この考え方は5時までです。5時を過ぎると、タイ人の価値観は一転して、「サヌック」(楽しい、おもしろい)かどうかに変わります。カラオケの席上でまだ仕事の話をする日本人上司は、最も嫌われることになります。まさに今の日本が目指しているワーク・ライフ・バランスそのものです。因みに、タイ語で「幸福」(クワーム・スック)というのは「苦からの解放」を意味します。

日本では、仕事の価値を測る基準は「サバーイ」ではなく、「サヌック」でしょう。でもそれでは、ワーク・ライフ・バランスは実現できないと私は思います(笑)。「仕事生きがい論」は、どうしても過重労働になりがちです。ワークでも一所懸命、ライフでも一所懸命になるからです。「頑張れ」という言葉が通じるのは、台湾と中国(加油)だけですね。タイで「頑張れ」に相当する言葉は、軍隊の訓練で使っている「死ぬまで戦え」しかありません。

—— 景気が悪い時代に育った現代の若者の一人としては、こんなに国も狭く

て、人口も1億人しかなくて、資源もない状態で経済規模が世界第2位、という状況に行き過ぎな部分があったのであって、その歪みが今出てきているのではないかと思います。これからは新しい世代で、成熟した社会ならではの豊かさを作っていけばいいのに、相変わらず古い価値観にとらわれた議論ばかりがされている気がしています。

末廣 今、みなさん苦しいと思います。私たちの世代は昨年より給与は上がって当たり前、逆に上がっていないと不安になるという考え方がでしたが、そういう考え方はもはや通用しない。そこで思い出した話があります。東畑精一先生(東大名誉教授、アジア経済研究所初代所長)からお聞きした話ですが、東畑先生がかつて大学で「植民地経済論」を教えていた時、重視した点は、各国が植民地を「どう支配したのか」の国際比較ではなく、「いつ、どのように撤退したのか」の比較の方だったという話です。戦後になって改めてこの点から見たときに、イギリスは比較的うまく撤退したが、日本は失敗し、多くの問題を残したとも言われました。イギリスは、第二次大戦後は、植民地宗主国の地位だけではなく、大英帝国の地位も失います。とはいえ、イギリスは国際社会の中でそこそこの地位を占めて、こんにちに至っている。

ここで言いたいことは、もう一度高度成長時代の栄光を取り戻そうという発想を、日本は捨てたほうがよいということです。日本が中国などに抜かれていくのは、他の国に勢いがあるからで、日本自身が転落しているわけではない。人口

成長率が低くて、若年労働人口の伸び率が下がれば、当然、経済成長率だって下がります。経済に勢いがなければ、国際的なプレゼンスも下がる。先般の国連総会では、オバマ大統領のスピーチが終わったあと、菅直人総理が演説を始める前にみんなゾロゾロ席を立ったそうです。これに対して、参加者の非礼を憤る意見もでしたが、大事なことは、残っている出席者に対して、相手の信頼と尊敬をかちとることのできる密度の濃いスピーチを日本がどこまでできるか、そちらのほうだと思います。

研究者としての本能を

—— 「選択」ということに話を戻すと、そういう成熟した社会の中で、今の学生は選択肢がありすぎて迷ってしまうようなところあるのかな、と思います。そういう学生に対して、先生から何かアドバイスできることがあるとすればどういうことでしょうか。

末廣 9月12日から1週間、インドのデリーに出張し、貧困を研究している日本人の若手研究者2名と会いました。ネルー大学(JNU)で研究をしており、キャンパスは広い自然公園といった感じですが。建物はほぼすべてレンガ作りで、エアコンも完備してなくて、研究環境は決していいとは言えません。そういう環境のもとで、2名とも研究を続けている。こういう研究生活は、まずは「インドのすべてを知りたい」という好奇心、次いで「何かやりたい」という自分なりの“思

い”、最後に体力がないと続かない。体力だけではなくて、気持ちに伴わないと続かない。彼らと会ってフレッシュな感銘を受けました。同時に、1981年に初めてチューロンコン大学に、客員研究員として長期滞在した頃の自分の“思い”を思い出しました。

私は自分で「蟻地獄の法則」と呼んでいるのですが、研究というのは蟻地獄の仕掛けみたいなものです。深くやりたければ、最初に円を広く描いて掘っていかなければいけない。円が小さいと底も浅くなるからです。博士論文とそれに付随する論文は書けるけれども、そこから先へと発展しない。縦にだけ深く深く穴を掘って博士論文を書いていると、結局、その穴から出られなくなるんです。これは人文・社会科学系だと十分あり得るので、学生には「蟻地獄の法則」として、紹介しています。最初は未完成でも、粗削りでもいいから、自分の好奇心や関心に従って、できるだけ風呂敷を大きく広げて課題に取り組み、その後、だんだんと絞り込んで論文を書いていけばいい。

私の場合、とにかく好奇心のおもむくままでした。おもしろいと思えば、他に片付けるべきテーマがあっても、そちらに目が向いてしまいます。97年にアジア通貨危機が発生した時には、タイが震源地だったこともあって、選択というよりも選ばざるを得なくて、通貨・金融危機の研究に着手しました。ところが、結果的にどんどんのめり込んで、それまであまり関心をもたなかった財政や金融の問題の前は、タイ人企業と日本企業の人事労務管理と労使関係の比較を研究し

ていました。地域研究の醍醐味は「人と人との関係」にあり、それを集約的に示す分野が、労使関係だと思ったからです。労使関係の研究の前は、タイの産業と企業、とりわけファミリービジネス(財閥)の研究を10年以上続けていました。テーマに違いはありますが、そのつど、私がおもしろいと思ったものを追っていったわけです。それは同時に、その時代ごとのタイ社会にとっての重要な課題でもあったと思います。

—— 研究者の“本能”みたいなものに基づいてテーマを追いかけているのでしょうか?

末廣 まさに本能ですね(笑)。30代の頃には、周りの人から「獲物を追う猟犬のようだ」と言われたこともあります。おもしろいものがあると、対象に向かって突っ走って行くんですね。ですから、最初の話に戻りますが、自分としては「選択」したという意識がありません。

サバーイ(気楽)といっても、私が言いたいのは「頑張らない」という意味ではなく、「頑張らないようにする」という方針を「選択」しているわけですから。選択肢を集めて、頭で計算して「選択」するのではなく、もっと気楽に、本能のおもむくままに、自分の好奇心を満たしていったらいいのです。こんなこと言うと、「そんなに気楽じゃないよ!」と他の地域研究者に怒られるかもしれませんが(笑)。

[2010年9月24日 東京大学社会科学研究所にて/インタビュー構成:徳久宗平]

[ミニ・アカデミックグルーヴ]は
テレメールで取り寄せることができます。



synapse

LIFE
- Chew it over

Academic Park

CHOICE

東京大学では、[CHOICE]に加えて、学問のわくわく感を伝えるフリーペーパー、[ミニ・アカデミックグルーヴ]3種類を発行しています。[ミニ・アカデミックグルーヴ]全4種類はテレメールを利用して取り寄せることができます。パソコンまたは携帯電話から以下のURL、またはTEL(自動応答電話)にアクセスして、資料請求番号をご入力ください。送料(後納)のみご負担ください。

URL <http://telemail.jp>

TEL 050-8601-0101(24時間受付)



【資料請求番号】

CHOICE [ミニ・アカデミックグルーヴ] → 958946

synapse [ミニ・アカデミックグルーヴ] → 958943

LIFE - Chew it over [ミニ・アカデミックグルーヴ] → 958945

Academic Park [ミニ・アカデミックグルーヴ] → 958944

【ミニ・アカデミックグルーヴ】についての 感想をお寄せください。

[ミニ・アカデミックグルーヴ]全4種類に関するご意見・ご感想を、メールまたははがきにてお送りください。お送りいただいた方の中から抽選で50名様に、[ミニ・アカデミックグルーヴ]制作のきっかけとなった、東京大学創立130周年記念出版物「ACADEMIC GROOVE」(東大出版会刊)をプレゼントいたします。なお、当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。

①氏名 ②年齢 ③職業(業種) ④住所 ⑤[ミニ・アカデミックグルーヴ]を知ったきっかけ ⑥あなたと東大との関係は? ⑦あなたの東大に対するイメージは? ⑧あなたが学問に期待することは? ⑨[ミニ・アカデミックグルーヴ]に関するご意見・ご感想(読んでいただいた[ミニ・アカデミックグルーヴ]の冊子名称を明記ください)

【申込締切】2011年2月末

【はがきの宛先】〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学本部広報課内「CHOICE編集部」宛

【メールアドレス】acgr@mladm.u-tokyo.ac.jp



ACADEMIC GROOVE

Now on sale!

<http://www.utp.or.jp/bd/978-4-13-003330-5.html>

Writers (Interviewees)

赤川学 (東京大学 人文社会学研究科 准教授)

池上高志 (東京大学 情報学環 教授)

池田謙一 (東京大学 人文社会系研究科 教授)

池谷裕二 (東京大学 薬学系研究科 准教授)

石田英敬 (東京大学 情報学環 教授)

伊藤啓 (東京大学 分子細胞生物学研究所 准教授)

遠藤秀紀 (東京大学 総合研究博物館 教授)

大西隆 (東京大学 工学系研究科 教授)

大野秀敏 (東京大学 新領域創成科学研究科 教授)

岡部徹 (東京大学 生産技術研究所 教授)

甲斐一郎 (東京大学 医学系研究科 教授)

勝野正章 (東京大学 教育学研究科 准教授)

北田暁大 (東京大学 情報学環 准教授)

隈研吾 (東京大学 工学系研究科 教授)

熊野純彦 (東京大学 人文社会系研究科 教授)

後藤純 (東京大学 高齢社会総合研究機構 特任研究員)

酒井邦嘉 (東京大学 総合文化研究科 准教授)

佐倉統 (東京大学 情報学環 教授)

佐々木正人 (東京大学 教育学研究科 教授)

佐藤健二 (東京大学 人文社会系研究科 教授)

佐野和美 (東京大学 教養学部附属教養教育高度化機構 特任助教)

島蘭進 (東京大学 人文社会系研究科 教授)

嶋田正和 (東京大学 総合文化研究科 教授)

清水哲郎 (東京大学 人文社会系研究科 特任教授)

白石さや (東京大学 教育学研究科 教授)

白波瀬佐和子 (東京大学 人文社会系研究科 教授)

城山英明 (東京大学 法学政治学研究科 教授)

末廣昭 (東京大学 社会科学研究所 教授)

杉浦清了 (東京大学 新領域創成科学研究科 特任教授)

杉山直 (東京大学 致物連携宇宙研究機構 主任研究員 / 名古屋大学 理学研究科 教授)

高橋慎一郎 (東京大学 史料編纂所 准教授)

高橋伸夫 (東京大学 経済学研究科 教授)

竹澤悠典 (東京大学 理学系研究科 特任助教)

田中純 (東京大学 総合文化研究科 教授)

塚谷裕一 (東京大学 理学系研究科 教授)

鶴岡篤雄 (東京大学 人文社会学系研究科 教授)

外村大 (東京大学 総合文化研究科 准教授)

中須賀真一 (東京大学 工学系研究科 教授)

西垣通 (東京大学 情報学環 教授)

西成浩裕 (東京大学 先端科学技術研究センター 教授)

野崎久義 (東京大学 理学系研究科 准教授)

長谷部恭男 (東京大学 法学政治学研究科 教授)

馬場章 (東京大学 情報学環 教授)

平野聡 (東京大学 法学政治学研究科 准教授)

樋渡展洋 (東京大学 社会科学研究所 教授)

藤原届一 (東京大学 法学政治学研究科 教授)

本田由紀 (東京大学 教育学研究科 教授)

松井彰彦 (東京大学 経済学研究科 教授)

松原隆一郎 (東京大学 総合文化研究科 教授)

水島希 (東京大学 情報学環 特任助教)

三ツ井崇 (東京大学 総合文化研究科 准教授)

宮田眞治 (東京大学 人文社会学研究科 准教授)

茂木健一郎 (脳科学者)

森田朗 (東京大学 法学政治学研究科 教授)

矢坂雅充 (東京大学 経済学研究科 准教授)

山邊昭則 (東京大学 教養学部附属教養教育高度化機構 特任講師)

吉澤剛 (東京大学 公共政策大学院 特任講師)

鷲谷いづみ (東京大学 農学生命科学研究科 教授)

[以上、五十音順]

Editors

泉真沙子 (東京大学 職員)

佐藤悠 (東京大学 職員)

菅原慶子 (東京大学 職員)

徳久宗平 (東京大学 職員)

堀越直人 (東京大学 職員)

山形昌未 (東京大学 職員)

南崎梓 (東京大学 特任研究員)

ユアン・マツカイ (東京大学 総合文化研究科 研究生)

Senior Editor

清水修 (東京大学 特任専門員)

Art Direction & Design

H+F design

Photographs (P14~17,P48)

西川節子

Supervisors

江川雅子 (東京大学 理事)

武田洋幸 (東京大学 広報室長)

本郷恵子 (東京大学 広報室副室長)

Cooperation

大木康

安富歩

山野泰子

中原淳

山本恵美

伊與木健太

菅野康太

飯島和樹

住田朋久

金畑喜美

竹内孝

茅根修

白川哲也

Special Thanks

濱田純一

印刷・製本

協同精版印刷株式会社

2010年11月13日 発行

編集・発行

東京大学

〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1

TEL. 03-5841-1046

FAX. 03-3816-3913

ACADEMIC GROOVE | CHOICE | The University of Tokyo